



NEWS LETTER

March 2026 Number

16

ご挨拶

演劇映像学連携研究拠点代表 兎玉 竜一

演劇博物館が運営する演劇映像学連携研究拠点は、2009年度より文部科学省から認定を受けた共同利用・共同研究拠点として活動を発展させてきました。本拠点の特色は、100万点を超える資料を収蔵する演劇博物館が母体であることを活かし、演劇博物館の収蔵資料のうち十分な学術利用がなされていない貴重な未公開資料・非公開資料を共同研究に供することにあります。

本拠点は具体的に、4種の共同研究事業を通じて、演劇・映像分野以外も含めた多彩な研究者による多角的かつ先進的な研究活動を推進しています。まず、「テーマ研究」は本拠点が提案した資料とテーマに関する共同研究事業です。「公募研究」は演劇博物館の非公開・未発表資料を対象とする共同研究課題を公募して実施しています。「奨励研究」は演劇博物館所属の若手研究者が中心となり、将来の共同研究の基礎となる資料調査を行っています。そして「主催事業」は本拠点主導により、国内外の研究機関や民間企業と連携して行う共同研究事業です。

2025年度は、2年間の活動が認められている共同研究チームの成果をまとめる年にあたり、活動を継続している「テーマ研究」3件と「公募研究」6件に加え、今年度より追加採択された「テーマ研究」2件のあわせて11件の共同研究チームが研究成果をまとめ、公開研究会の実施、対象

資料のデータベース公開作業等を通じて広く国内外に広く発信されました。

「奨励研究」では今年度新たに4件の研究課題が採択されました。演出家・劇作家・小説家として明治後期から昭和初期にかけて活躍した小山内薫の関係資料を中心とした調査・整理、沖縄戦・沖縄の歴史を題材とする「沖縄もの」演劇の系譜についての調査、中国演芸貴重資料の目録の作成・公開、日朝両国の新派映画を比較分析といった様々なテーマで、学内外の研究者等と協力しながら、多岐にわたる演劇博物館の膨大な資料の調査・考証が進められました。成果の一部は演劇博物館の春季企画展「演劇は戦争体験を語り得るのか——戦後80年の日本の演劇から——」、秋季企画展「日中演劇交流展—欧陽予倩・田漢と日本」などで発表されました。

そして「主催事業」は、①国内外の民間企業や研究機関との緊密な連携、②デジタル資源と技術の活用可能性の開拓が継続して展開されました。①については、昨年度から継続して、国立映画アーカイブとの共催事業として、7月に演劇博物館所蔵の『朝顔日記』、国立映画アーカイブ所蔵の『旧劇 太功記十段目 尼ヶ崎の場』の二作品を旧劇映画の女流義太夫による出語り上映を試みるシンポジウムを、9月には、尾上松之助遺品保存会との共催で「活動写真弁士の皆さんによる「声色掛け合い」と和洋合奏団「カラード・モノトーン」による『無声映画 活弁上映会』と、2つのイベントを開催しました。また、国際的な研究交流は継続的に推進しており、バーミンガム大学との連携事業として、シェイクスピア研究と日本演劇研究の資料と方法をめぐるオンライン対談が、3年連続で実施されました。②に関しては演劇・映像資料の基礎研究のためのアーカイブとして、「テーマ研究」や「公募研究」といった共同研究事業を通じてデジタル化・目録化された資料や、その他共同研究による成果として、未公開のデータベースを早稲田大学文化資源データベースに公開する準備を進め、貴重な資料の保全と共有に努めています。

本拠点はこれからも演劇博物館が所蔵する豊かな研究資源とデジタル技術を活用し、当該分野の研究を牽引するハブとして活動してまいります。今後とも皆様のご支援とご協力を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

contents

■拠点代表あいさつ	1 p
■令和7(2025年度)テーマ研究成果報告	2 p
■令和7(2025年度)公募研究成果報告	7 p
■令和7(2025年度)奨励研究・拠点主催事業成果報告	13 p
■2020年度～2025年度外部評価	16 p
■Mission and Vision	19 p
■Report on Principal research, fiscal 2025	20 p
■Report on Selected research, fiscal 2025	25 p
■Encouragement Research Project/ Project Organized by the Center	31 p
■AY2020-2025 External Evaluation	33 p

テーマ研究

1

久保栄資料の調査研究

研究代表者：阿部由香子（共立女子大学文芸学部文芸学科教授）

研究分担者：赤井紀美（東北大学大学院文学研究科准教授）、熊谷知子（早稲田大学演劇博物館助手）、藤崎景（明治大学大学院）

【研究目的】

本研究では、戦前から戦後にかけて日本の新劇界を牽引した劇作家・演出家の久保栄（1900～1958）の、未整理・未公開の演劇博物館所蔵の資料について、特に久保栄と築地小劇場との関わりに着目し整理・調査・考証を行う。1926年に築地小劇場文芸部に入った久保は小山内薫、土方与志のもとで演劇を学び、小山内没後に代表作を次々に発表する。久保の創作活動において築地小劇場での経験および小山内からの影響は大きく、これらを検討することで、一次資料をもとにした久保栄の基礎的研究の基盤を固めることができると思う。

【研究成果の概要】

久保栄は様々な新劇の劇団の活動・創設に携わり、戦前から戦後の新劇界で大きな地位を占めた作家だが、現在その研究が進展しているとは言い難い。演劇博物館には久保の養子の久保マサ氏より多くの資料が寄贈されたが、ほぼ未整理の状態であり、久保栄研究の基盤を形成するためにはそれらの資料整理が急務である。

昨年度は混在する様々な資料を分類整理し、自筆の原稿やノート、書簡類などを中心に目録化を行った。今年度も引き続きこれらの作業を行いつつ、さらに分類が難しい雑多な資料の分類整理に着手した。

これらの資料は新聞記事の切り抜きやメモ、断片的に書かれた日記やスケジュール帳、写真、書簡、権利関係書類などが混在しており、ひとつひとつを確認し保存の方法や目録化について検討する必要がある、多くの時間を要した。

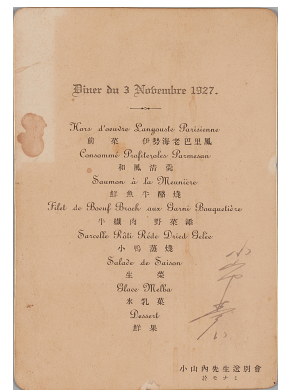
今回の整理により、久保栄の師匠である小山内薫関連の資料や、久保栄最晩年の病気療養中の日記など、貴重な資料が多数発見された。小山内薫の関連資料では小山内が1927年にモスクワを訪問する際に銀座のモナミで開催された送別会のメニュー表（小山内の署名入り）や、1927年12月2日付のモスクワから築地小劇場の劇団員に宛てて送った絵葉書があった。絵葉書には劇団員を労う言葉とともに「空気饅頭」（ロマショフ作）観劇の予定などが書かれており、モスクワ滞在中の小山内の生き生きとした様子が記される。メニュー表など

を久保が丁寧に保管していた様子もうかがわれ、久保にとっての小山内の存在の大きさが伝わる。

メンバーの熊谷知子は演劇博物館所蔵の小山内薫の葉書の翻刻・紹介も行っており（熊谷知子「資料紹介 小山内薫葉書（小山内登女子宛）紹介」『演劇研究』第49号）、これら既存の所蔵資料とあわせて検討することで、本資料が小山内薫研究の進展の一助になることも期待される。

久保栄資料の整理・調査および築地小劇場との関わりを検討してきた成果として、赤井紀美、熊谷知子、藤崎景はパネルセッション「早稲田大学演劇博物館所蔵資料からみる新劇と興行」（2025年度日本演劇学会全国大会、広島大学東広島キャンパス、2025年6月22日）を行った（ディスカッサントは児玉竜一演劇博物館長）。

「興行」という視点から改めて演劇博物館所蔵の新劇関連資料を紹介する試みであり、赤井は戦時下の移動演劇について久保栄旧蔵資料の書簡や、内閣情報局の資料から検討した。熊谷は築地小劇場の売上票をもとに劇団としての築地小劇場の興行としての側面について明らかにし、藤崎は劇場としての築地小劇場について考察した。研究代表者である阿部由香子も席上議論に加わった。



画像1 小山内薫送別会メニュー

「久保栄関係資料 スクラップブック [72479] より」
Image 1: Osanai Kaoru's farewell party menu
From a scrapbook of materials related to Kubo Sakae



画像2 小山内薫ハガキ（ロシアから）

「久保栄関係資料 スクラップブック [72479] より」
Image 2: Postcard from Osanai Kaoru (from Russia)

テーマ研究

2

倉林誠一郎旧蔵資料を中心とする戦後新劇の調査研究

研究代表者：後藤隆基（立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター特定課題研究員）

研究分担者：神山彰（明治大学文学部名誉教授）、児玉竜一（早稲田大学文学学術院教授、演劇博物館長）、米屋尚子（文化政策・芸術運営アドバイザー）、藤谷桂子（早稲田大学図書館司書）

【研究目的】

敗戦直後の1946年に俳優座に入団した倉林誠一郎（1912～2000）は、56年に俳優座劇場を設立し、81年に代表取締役役に就任した。また、65年には日本初の芸能実演家の統一団体である日本芸能実演家団体協議会（芸団協）の設立に参画し、舞台芸術における実演家の権利保護や文化活動の支援、政策提言等に多大な影響を及ぼした。

本研究では、倉林誠一郎旧蔵資料のうち、日記・スクラップブック・手帳・ノート・書簡等の調査・考証を通して、演劇制作者としての倉林誠一郎の再評価を行い、戦後新劇の基礎的研究のための基盤形成を図るものである。倉林自身が「創造団体と観客との中間に存在し、両者の立場、考え方を客観的に、正しく理解し、それをつたえ合うという、重要な役割を担っている」（『演劇制作者』）と規定した「演劇制作者」の重要性は、演劇における観客論を考察するためにも看過できないものであるが、これまでは研究対象と見なされてこなかった。倉林の事績を明らかにすることで、実際に演劇現場を運営し、公演を実施してきた制作者の影響力を測定し、作家・演出家・俳優等の創作主体からの視点にとどまらない演劇（史）研究への視角をひらくとともに、戦後新劇の多面的な興行様態等を解明することを目的とする。

【研究成果の概要】

本年度は、これまで翻刻作業を進めてきた「倉林誠一郎日記」全79冊（1947年6月～2000年3月）のうち、1947年から1952年まで——すなわち占領期にあたる時期の翻刻・確認等を継続した。本プロジェクトメンバーによる解題や論考等を併載し、『倉林誠一郎日記 占領期篇』と題して2026年の出版に向けた作業を行なっている。本日記は、戦後新劇（演劇）研究に資する資料であり、興行の裏側までも事細かに記述した倉林のまなざしを通して、新劇のみならず、占領期における演劇・映画等の実態が生動感をもって伝えられるものと考えて

いる。なお、本日記の公刊はJSPS科研費21K00199の成果の一部でもある。

また、本プロジェクト主催公開研究会「日中文化交流と演劇の諸相——戦後演劇資料とその周辺」（2025年10月21日、早稲田大学 戸山キャンパス 33号館 3階 第一会議室）を開催した。倉林誠一郎は、日本演劇代表団訪中（1957年）や第一次訪中新劇団（1960年）に事務局長として参加し、その関連資料が演劇博物館に寄贈されている。訪中新劇団は千田是也や杉村春子らが中心となって第二次（1965年）、第三次（1981年）と継続し、さまざまな演目が上演された。それら戦後新劇関連資料を、日中演劇交流の足跡を証するものとして展覧に供した演劇博物館2025年度秋季企画展「日中演劇交流展——欧陽予備・田漢と日本」と連動する企画として、倉林旧蔵資料をはじめとする館蔵資料等を紹介するとともに、日中文化交流において演劇が担った多様な役割について考える機会とした。

まず熊谷知子氏（演劇博物館助手）が「日中演劇交流展」の概要と展示資料に関する報告を行ない、次いで後藤が訪中新劇団に関わる倉林旧蔵資料等を紹介しながら、安保反対による反米の機運が日中文化人の連帯に影響が大きかったことを補足した。それをふまえて、演劇評論家の大笹吉雄氏にご登壇いただき、児玉竜一演劇博物館長が聞き手を務め、同時代の実態や日中演劇交流の様相、現時点での課題等について、幅広くお話を伺った。倉林旧蔵資料の調査結果の紹介に加えて、企画展と連動することで、膨大な資料を用いた展示で表現しきれなかった視角を提示できた点でも少なからぬ意義があったと考える。

また、上述した『倉林誠一郎日記 占領期篇』の公刊は、本プロジェクトのひとつの集大成だが、1953年以降の日記も翻刻の必要はある。占領期に続く日記は俳優座劇場の建設・開館にあたる時期であり、2025年に同劇場が閉館したことに鑑みても、倉林日記の調査を通して得られる成果は大きく、日記以外の資料も含めて調査を行う機会が求められる。

映画関連資料を活用した戦前期の映画興行に関する研究

研究代表者：岡田秀則（国立映画アーカイブ主任研究員）

研究分担者：紙屋牧子（武蔵野美術大学造形学部非常勤講師）、柴田康太郎（東京藝術大学音楽学部非常勤講師）、白井史人（慶應義塾大学商学部准教授）

【研究目的】

本研究は、演劇博物館が所蔵する、草創期から戦前期までの映画館チラシを中心とした映画宣伝資料を読み解くことによって、映画館における上映プログラム、活動写真弁士や楽士等による実践、映画フィルムの配給方法の変遷等を考察し、いまだ十分に歴史化されているとは言い難い、同時代における日本映画の配給・興行の諸相を明らかにすることを目的とする。

本年度は、2020年度の公募研究より当チームが蓄積している研究成果も活用しつつ、映画館チラシとの相互補的關係にある駒田好洋コレクションにも視野を広げた調査をおこなうことによって、より包括的な研究および成果公開を目指した。

【研究成果の概要】

本年度も新たな資料目録の作成を進めるとともに、これまでのチームの研究活動をふまえた成果公開をおこなった。まず研究の基盤をなす資料調査として、前年度から継続して演劇博物館所蔵の6冊の駒田好洋旧蔵スクラップブックのうち、未着手の2冊について目録化と分析を進めた。これらは複雑な資料の貼りこみがなされており目録化の精緻化には時間がかかるが、当チームが調査してきた映画館チラシと重なる大正期の新聞記事やチラシのスクラップを含み、今後さらなる考証を進める予定である。

また二年間の活動を締め括るものとして、2023年以来、二度目となる琵琶映画の「再現」上映に取り組んだ。今回は柳井イニシアティブの協力を得て昨年度にデジタル化した神戸映画資料館所蔵フィルム『筑紫の太刀風 石童丸』（1925年）と国立映画アーカイブ所蔵の琵琶台本を用い、川嶋信子氏（薩摩琵琶）、片岡一郎氏（映画説明）、堅田喜三代氏（鳴物）を迎えた伴奏付上映をおこなった。また上映前の第1部のシンポジウムでは紙屋牧子（研究分担者）、白井史人（研究分担者）、柴田康太郎（研究分担者）がそれぞれ、琵琶映画の系譜、同作品の歴史的背景、ドイツにおける無声映画の実践をテーマに研究発表をおこない、第2部では児玉竜一館長の演目解説や演者とのトークをまじえ多角的な討議をおこなった。

さらに映画興行資料に関する当チームの成果公開の

一環として、柴田は日本映像学会第51回全国大会で大正期の映画供給体制と札幌の映画館についての口頭発表をおこなった（2025年6月1日／於神戸大学）。岡田秀則（研究代表者）は、「全国映画資料アーカイブサミット2026」（国立映画アーカイブ（令和7年度アーカイブ中核拠点形成モデル事業）主催／2026年1月23日／オンライン）において、映画資料の保存と活用に関わるプログラム作りに主導的な役割を果たした。またフランスで開催された上映特集「日本の無声映画」（ジェローム・セドウ＝パテ財団主催）において、会期中の2025年10月21日から25日まで、連日上映作品の解説をおこなった。紙屋は本研究の成果の一部を収録した書籍『戦争と占領の日本映画史——歴史の「闇」を捉え返す』（青土社）を2025年10月に公刊した。



駒田好洋旧蔵資料より [16758-1_009]
From the Komada Koyo Collection



映画上映とシンポジウム
「甦る、琵琶映画の響き2026」（2026年1月29日）にて
左より児玉竜一館長、片岡一郎氏、川嶋信子氏、堅田喜三代氏
Post-screening discussion at the “Rivising the Sounds of Biwa
Film 2026” screening and symposium (January 29, 2026)
From left: Prof. Kodama Ryuichi, Kataoka Ichiro, Kawashima
Nobuko, Katada Kisayo.

テーマ研究

4

タイニイアリス小劇場関連資料の体系的整理に関する研究

研究代表者：金潤貞（椋山女学園大学外国語学部国際教養学科専任講師）

研究分担者：岡田蒔子（京都芸術大学舞台芸術学科専任講師）

【研究目的】

本研究では、タイニイアリス小劇場（1983～2015）に関する膨大な関連資料（公演関連書類、ポスター、パンフレット、チラシ、写真、映像記録、批評記事等）の体系的整理・目録化を行い、資料保存・活用のための基盤形成を図る。とりわけ「タイニイアリスフェスティバル」関連資料を中心に調査・整理を進め、その歴史的展開と文化的意義、ならびに2000年代以降に活発化した日韓演劇交流における位置づけを資料に即して明らかにすることを目的とする。これにより、演劇・音楽・ダンス・映画等にわたる実験的実践を支えた同劇場の拠点性を具体的に検証し、日本の小劇場運動および越境的文化交流史の基礎的研究に資する研究資源の整備をめざす。

【研究成果の概要】

本年度は、演劇博物館に寄贈されたタイニイアリス小劇場関連資料のうち、とりわけ「タイニイアリスフェスティバル」関連資料を対象に、初期整理を先行して進めた。具体的には、散在していたフェスティバル関連資料（チラシ、プログラム類、上演・企画情報が記載された印刷物等）を抽出し、開催年次・会期等の情報に基づいて時系列に沿った配列・分類を行い、資料群の全体像を把握した。これにより、フェスティバルが継続的に扱ってきた領域（演劇・音楽・ダンス・映画等）や、企画の反復・更新のパターンを、資料群の編成として把握し、今後の整理・検討の見通しを得た。

あわせて、資料内容の詳細把握を目的とする打ち合わせを継続し、資料に現れる固有名（参加団体・上演作品・会場表記・共催／協力等）を確認しながら、開催経緯、参加団体の傾向、上演形態や交流の枠組み等について基礎情報の検討を行った。その際、関連する企画・シリーズの連続性についても照合を進め、今後の目録化における記述精度の向上に資する作業を行った。

また、資料上で情報が不明確な項目や企画間の関係

性については、協力者である金世一（演出家・俳優）への聞き取り調査を併用し、個別資料の位置づけを確定する作業を進めた。寄贈資料は印刷物の体裁が近似するものも多く見られていたが、聞き取りを通じて当時の運営実態や制作上の慣行を参照し、同一企画に関わる複数の資料と、派生企画、周辺イベント等を区別するための手がかりを得た。これらの作業は、資料を単に配列するにとどまらず、背景情報を伴った整理単位（資料群）を設定するうえで重要である。

さらに、映像資料については、協力者の知見を踏まえつつデジタル化の優先順位を選定し、今後のデジタル化・保存作業（実作業は演劇博物館が担当）に向けた基礎設計を行った。映像は媒体や収録内容が多様で、劣化リスクや再生環境の制約も大きいことから、内容の希少性、フェスティバル史上の重要度、他資料（チラシ・写真・批評等）との照合可能性といった観点から優先順位を整理した。加えて、チラシデータの時系列的整理を進め、将来的なデータ登録に向けた準備を整えた。

以上の成果は、最終的な目録の完成や分析成果の公表には至らないものの、小劇場タイニイアリス資料の中核である「タイニイアリスフェスティバル」関連資料について、時系列軸に基づく整理枠組みを先に確立し、資料群の性格と研究上の論点を明確化した点に意義がある。本研究はJSPS科研費23K00226と連携して実施しており、国内外のアーティストを招聘したフェスティバル運営の実態や、2000年代以降の日韓演劇交流に接続する活動の手がかりを、資料と聞き取りを突き合わせながら確認できたことは、今後の本格的な目録化・分析の前提となる。

今後は、引き続きフェスティバル関連資料の詳細目録作成とデータ登録を進めるとともに、映像資料のデジタル化の進行に合わせて、資料間の相互参照（上演記録・批評・写真等）を組織化し、研究・教育活用に耐える形での整理・公開方法を検討する。

前田直資料の調査研究

研究代表者：斎藤慶子（愛知県立大学日本文学部歴史文化学科准教授）

研究分担者：伊藤愉（明治大学文学部准教授）、森谷理紗（京都大学人文科学研究所特定准教授）、近藤つぐみ（早稲田大学演劇博物館助教）

【研究目的】

2024年2月、元大日本帝国海軍軍人の前田直（まえだなおき 1896～1964）のご遺族香取孝雄氏より演劇博物館に彼の旧蔵資料が寄贈された。前田は、1932年から34年までモスクワにてソヴィエト連邦在勤帝国大使館附武官補佐官に任じられた。太平洋戦争開戦時にはハルビン駐在武官となり、満州で終戦を迎えた後はソ連に抑留され、1953年に復員した。寄贈資料の主要な部分を占めるのが、前田がモスクワ駐在期間中に現地で収集した演劇関連資料である。本研究では、資料調査をもとに次のふたつの目的を達成することを目指している。第一の目的は、戦前ソ連の舞台芸術を実際に目にした日本人の稀有な記録を精読することで、当時の日本人が異文化体験としてソ連芸術をいかに受容したかを詳らかにすることである。二つ目は、戦後の日本文化に大きな影響を与えたシベリア抑留者たちが収容所で体験していた舞台芸術の源を理解することにある。収容所では、ソ連の社会主義プロパガンダの一環として、演芸活動の実践が奨励されていた。彼らが受容したソ連舞台芸術の元となっている舞台を観たのが前田ということになる。

【研究成果の概要】

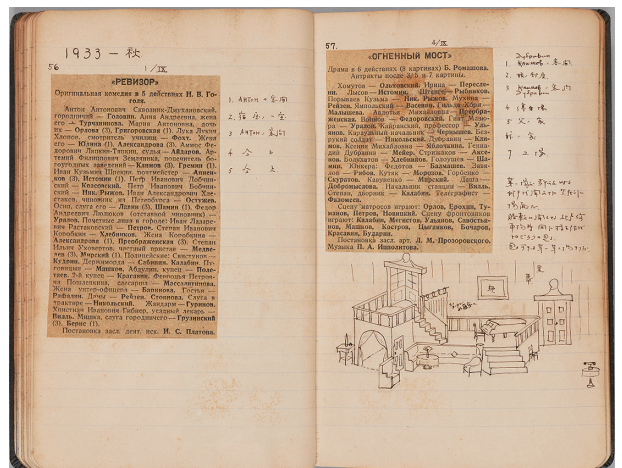
寄贈された資料のうち演劇博物館が収蔵したのは、ソ連演劇・バレエ・オペラの舞台写真やプロマイドが255葉、露語書籍36冊、モスクワ駐在期間の観劇日記1点、日本語で書かれた葉書1通、歌舞伎のプログラムの下絵7枚組1点等である。そのほか早稲田大学中央図書館に移管された70冊の書籍から、必要な選定作業を経て40冊が同館に収蔵されることとなった。ほかの前田直旧蔵資料の大部分は大和ミュージアム（呉市海事歴史科学館）、および神戸映画資料館に収蔵され、一部資料はご親族の手元に残されている。これらを総合的に検討することで、ロシア演劇史、日本海軍による情報活動、戦時プロパガンダのための芸術利用、シベリア抑留者の体験など、多方面の研究の展望が開ける可能性が出てきた。

本プロジェクトは2025年4月に始動した。初年度は、第一にご親族への聞き取り調査、第二に観劇日記の翻刻と鑑賞演目の目録作成、第三に前田直の来歴をあき

らかにした論文の執筆依頼を行った。

聞き取り調査では、香取孝雄氏とご親族の加藤順子氏にご協力いただいた。観劇日記の翻刻では愛知県立大学日本文学部の学生5名、鑑賞演目の目録作成（日露両言語）では明治大学文学研究科演劇学専攻大学院生の助力を得た。ソ連の舞台芸術を現地で観劇し感想の記録を残した者には、鳴海完造や小山内薫、園池公功といった先達が挙げられる。前田の記録の特異性は、軍人という職業の一般的イメージからすぐには想像できないような、演出に関する卓越した観察眼と、舞台装置のスケッチの几帳面さにある。その書きぶりからは、のちにみずから実践するための覚書のつもりだったのではないかということが推察される。

聞き取り調査の結果、これまでご親族の求めに応じで協力してきた研究者たちの成果を知るところとなった。公刊に至っていないものも複数存在する。その中から海軍時代の前田の活動について綿密な調査を行った、日本大学大学院文学研究科博士後期課程所属の沖田恭祐氏に演劇博物館紀要への投稿を依頼した（『演劇研究49号』に掲載予定）。同氏の論考は、前田が就いていた任務こそが広範な収集活動を可能にしたことをあきらかにした。



前田直ソヴィエト観劇日記（1932～1934年）[61262]
1933年9月4日マールイ劇場上演『火の橋』
（ボリス・ロマショフ作、レフ・プロゾロフスキー演出）メモ
Naoki Maeda's theater-going notes (September 4, 1933)
Maly theatre "The Fire Bridge" written by Boris Romashov
and staged by Lev Prozorovsky

公募研究

1

岡本綺堂旧蔵資料に関する基礎的研究

研究代表者：横山泰子（法政大学理工学部創生科学科教授）

研究分担者：東雅夫（文芸評論家、アンソロジスト）、小松史生子（早稲田大学文学学術院教授）、鈴木優作（鹿児島大学法文学部附属「鹿児島近代」教育研究センター特任助教）、原辰吉（世田谷文学館学芸員）、松田祥平（大谷大学文学部任期制助教）、脇坂健介（学習院高等科）、勝倉明以（名古屋市立東丘小学校）

【研究目的】

本研究では、2022年に生誕150年を迎え、演劇と文学という両領域において大きな足跡を残した岡本綺堂（1872～1939）旧蔵資料の基礎的調査・分析を行うのが目的である。綺堂は戯曲、劇評、小説、随筆、翻訳と様々な分野で活躍した作家であり、近年では近代演劇、近代文学の研究領域のみならず、怪異・怪談・妖怪研究など多様な領域からも注目を集めている。しかし、養子である岡本経一氏の著作以後、綺堂の資料に関する基礎的調査は十分に行われておらず、研究もすすんでいない。本研究では、特に未発表・未翻刻の日記に着目し、これらのデジタル化および翻刻を行う。当該資料は作家岡本綺堂の後半生を知るうえでの一級資料であり、翻刻を広く公開することで、綺堂の活動や創作に対する新たな視点を提示できると考える。

【研究成果の概要】

演劇博物館には1923年7月から1938年12月までの岡本綺堂の自筆の日記が所蔵されており、そのうち1931年から1938年までの8年間の日記が未公開・未翻刻である。本チームでは昨年に引き続き日記の翻刻を行い、1931年1月～12月、1932年1月～12月を2025年7月にまとめて公開する運びとなった。

当該部分の日記において、綺堂は60歳の還暦を迎えており、旺盛な執筆活動に加え、雑誌『舞台』の編集や後進の育成に尽力する様子がかがえる。満洲事変の勃発や東京市の編成拡大など、社会的に大きな出来事が様々起こるなか、都市生活者としての綺堂の淡々とした日常が記されており、個人の記録から歴史を照射する貴重な資料であるといえる。

日記公開を記念し、「岡本綺堂の日常生活—「岡本綺堂日記」昭和6・7年公開記念シンポジウム—」（2025年8月23日(土)、早稲田大学3号館401教室）を開催した。

原辰吉「岡本綺堂における昭和6・7年

—『綺堂全集』と『独吟』—、赤井紀美「指導者としての岡本綺堂—嫩会と雑誌『舞台』—」、松田祥平「捕物帳ジャンルの再編と岡本綺堂」、鈴木優作「歴史を相対化する民衆のまなざし—岡本綺堂「西郷星」論—」の四つの研究報告に加え、東雅夫、横山泰子、小松史生子による鼎談を行い、綺堂作品の魅力や新たな意義について検討した。

対面会場、オンライン配信併せて100名近くが参加し、質疑応答では様々な意見が交わされた。小説家の京極夏彦氏からも、岡本綺堂や探偵小説に関する興味深いコメントがあり、綺堂とその作品が幅広い興味関心を喚起し得る存在であることを、改めて確認することができた。

本年度はさらに1933年1月～12月、1934年1月～12月の翻刻の公開も行った。当時、綺堂は住み慣れた麴町区元園町から上目黒の別宅に移転したため、東京の郊外の生活の様子がよくわかる記述が多い。

翻刻した日記は、既に演劇映像学連携研究拠点HPで公開しており、今後も更新する予定である。広く公開することで、多くの人に利活用されることが期待される。

2年間という短い活動期間に4年間分の日記の翻刻・公開を行ったことは、大きな成果を果たしたと言えるが、残り4年分の日記は未翻刻であり、綺堂の最晩年が記されたこれらの日記の翻刻も継続して行なう必要があると考える。



画像1 昭和6・7年の翻刻・公開した日記の表紙
Image 1: Cover of the 1931-1932 diaries transcribed and published



画像2 シンポジウムのチラシ
Image 2: Flyer for the symposium

日記から考える歌舞伎役者を中心にした江戸中期の文芸圏研究

研究代表者：ビュルク・トーヴェ（埼玉大学人文社会科学部研究科教授）

研究分担者：稲葉有祐（和光大学表現学部准教授）、日置貴之（明治大学情報コミュニケーション学部教授）

【研究目的】

本研究の目的は、「二代目市川團十郎栢庭日記」を基礎資料として、①「栢庭日記」の成立経緯および史料としての信憑性を検討すること、②江戸中期の歌舞伎役者を中心とする文芸圏のあり方を明らかにすることにある。『栢庭日記』は、日記本『柿表紙』とともに、狂歌師・鹿都部真顔の主治医とその息子によって書写されたもので、江戸中期の歌舞伎役者の生活や、彼らを取り巻く文芸圏を伝える重要な史料である。本研究では、この日記本を出発点として、享保期の歌舞伎役者を取り巻く環境を解明するとともに、歌舞伎役者と俳人・文人との関係性を明らかにすることを旨とする。

【研究成果の概要】

本年度は、第一に日記本の注釈および解説の継続、第二に二代目團十郎日記『柿表紙』および初代中村仲蔵日記『月雪花寝物語』に見られる江戸三大祭における付け祭の記録、ならびに京都・祇園祭の花街の練り物行列を描いた浮世絵シリーズをもとに、町娘による踊りや素人による歌舞伎模倣の方法を検討した。第三に、歌舞伎常連であった大和郡山藩第二代藩主・柳沢信鴻の日記『宴遊日記』を分析し、大名屋敷における歌舞伎公演の実態、お狂言師の役割、素人上演の制作過程について考察した。第四に、18世紀末以降に出版された歌舞伎劇場の案内書や歌舞伎役者の家譜を紹介する書物など42点を対象に、当時における歌舞伎の由来や伝承の語り方を分析し、幕府公認の家業であることが強調されるに至った経緯を明らかにした。

二代目市川團十郎の日記詳解は研究代表者ビュルクが継続して担当し、第10回を『埼玉大学紀要 教養学部』第61巻第1号、第11回を同第61巻第2号に発表した。今回対象とした記載期間は享保19（1734）年6月25日から7月1日まで7日である。この間、二代目團十郎は目黒の別荘周辺の寺社に家族や俳人の友人、劇場関係者と参詣し、祐天寺の和尚・二代目祐海から、元禄期の道化役者・西国兵五郎を題材とする説法を聴いている。また同時期、森田座を取り仕切っていた二代目坂東又九郎が死去した記述から、森田座の休座や歌舞伎

界が控え櫓を取得するに至る経緯という、歌舞伎史上きわめて重要な転換点の具体的な状況を読み取ることができる。

第二の調査成果は、2025年6月10日にドイツ・ケルン大学で開催されたInternational Federation for Theatre Research において、「The Walk of Fame – Women of the Licensed Quarters Dressing like Kabuki Actors in Early Modern Festival Parades」と題して発表したほか、共同研究者の日置が明治大学主催パフォーミング・アーツ研究所研究発表会において「近世期における歌舞伎の再現方法」として発表した。主な成果として、祭礼で再現された歌舞伎の登場人物は複数の四つのグループに分類でき、それぞれにおいて象徴的要素が選択・強調されていたことを明らかにした。

第三の調査成果は、論文『『宴遊日記』にみる柳沢信鴻邸の歌舞伎上演とお狂言師たち』としてまとめられ、雑誌『藝能史研究』に掲載予定である。本論文では、柳沢信鴻が屋敷内で歌舞伎公演を準備する際、当時の劇場で人気を博していた踊りの場面をまず出演者に稽古させ、その後複数の浄瑠璃本を組み合わせて構成していたことを明らかにした。また、信鴻邸でお狂言師を務めた女性は、初代中村仲蔵の親族、あるいは中村座関係者であった可能性を指摘した。

第四の調査結果として、歌舞伎の由来を神楽に求める説明や、中国演劇との関連をパロディ的に紹介する記述が見られる一方、阿国など今日歌舞伎の創始者として語られる初期の歌舞伎演者の存在感は比較的弱いことが判明した。また、幕府から認可された櫓の取得や、歌舞伎役者が家業を世襲する職業であることが強調される傾向が確認され、歌舞伎界が正統性を備えたイメージを形成しようとする意図があった可能性を示す仮説を提示した。この成果は Critical Stages/Scene critiques (Dec 2025, No. 32) に掲載された。

以上が、本研究の2025年度における主な成果である。今後は、二代目團十郎の日記に見られる歌舞伎関係者と江戸の文人・俳人との具体的関係をさらに分析し、文芸圏の実態を一層明らかにしていく予定である。

公募研究

3

GHQ占領期における地域演劇の実証的研究——九州地区を中心に

研究代表者：小川史（横浜創英大学こども教育学部教授）

研究分担者：須川渡（立命館大学文学部准教授）、畑中小百合（大阪大学非常勤講師）

【研究目的】

本研究の目的は、敗戦直後に九州地区で行われた演劇の性格を明らかにすることである。研究は、九州地区劇団占領期GHQ検閲台本（デザイナー・コレクション）の分析を通して行う。

【研究成果の概要】

本年度はデザイナー・コレクションのなかから、台本13点のデジタル化を行なった。これらの成果は、2025年5月開催の20世紀メディア研究所第186回研究会において発表した。あわせて、同研究所紀要『Intelligence』への論文の掲載を予定している。

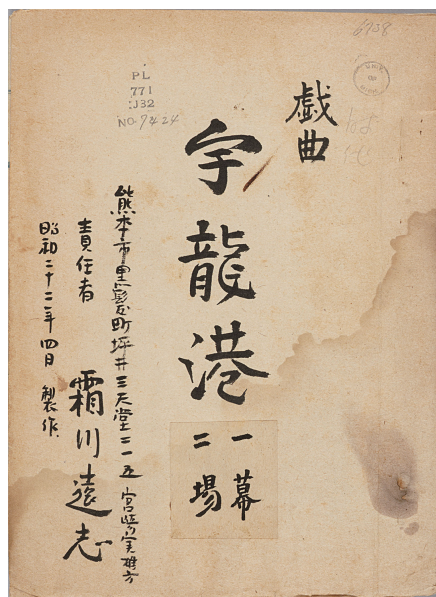
各研究分担者それぞれの調査は以下の通りである。

素人演劇については、広島県の黎明座による申請台本の調査を行った。疎開演劇人の竹中荘吉が率いる黎明座が申請した台本はコレクションに多く残されているが、それら台本の検討により、戦前から活動していた演劇人が地域にもたらした演劇文化の一端を明らかにすることができた。また、地域の演劇活動に関わる検閲申請の実態を明らかにした。

熊本の劇団では、一昨年度に実施した劇団オリオン座の調査および、昨年度に進めた劇団文藝座と霜川遠志の作品研究を踏まえ、戦後熊本における少女歌劇と新劇の表現的差異について検討を行った。具体的には、上演不許可となった作品の経緯を手がかりに、文藝座および霜川の戯曲が、復員兵や農地改革、価値観の断絶といった戦後社会の矛盾や葛藤を主題化し、批評的視座から戦後改革を捉えていた点を明らかにした。一方で、オリオン座は、新憲法や配給制度、戦後民主主義といった同時代的な諸要素を積極的に取り込み、娯楽性と時事性を前面に押し出した作品を上演していたことが確認された。この比較を通じて、同時代・同地域においても、ジャンルの差異が戦後社会の受容や表象のあり方に大きな影響を及ぼしていたことを示した。また、文藝座のレパートリーには、徳富蘆花『灰燼』や宮沢賢治作品など既成文学作品を原作とするものも含まれており、今後はそれらが霜川によっていかに翻案・再構成され、独自の戯曲へと転化していったのかを検討課題としていきたい。

大衆演劇ジャンルについては、九州を本拠地とし戦

前から占領期にかけて人気を博していた樋口次郎劇団、南條隆劇団、三河家桃太郎劇団、江味三郎劇団、大川竜之助劇団などを中心にその内容の検討を行った。現時点までの調査でわかっていることは、当時の大衆演劇がバラエティに富んでいたという事実である。股旅ものや仇討といった定型を含む作品は多いが、それを当時の世相に置き換えた「復員兵もの」、船乗りのロマンを描いた「マドロスもの」、なかには進駐軍が登場する作品もあり（ただしその多くは検閲で「不許可」となっている）、当時の大衆演劇が旧時代の演目にこだわることなく観客の喜ぶものを模索し続けていたことがうかがえる。今はほとんど上演されることのない節劇（浪曲の節にのせて行われる演劇）や、数は少ないながらも連鎖劇（活動写真の上映と演劇を交互に行うもの）の台本も実物を確認した。こうした台本はかつての上演形態を研究する上でも貴重な資料になると思われる。大衆演劇ジャンルの台本は膨大で、今年度までにようやくその五分の一程度を検討することができた。今後も地道な資料調査を継続する予定である。



『宇龍港』[GHQ06738] 霜川遠志作。1947年4月製作
副題に「戦争放棄を主題とせる」掲げる。本作はのちに、
日本演劇協会編『高校演劇脚本集 第3集』（宝文館、1956年）に
「ある敗北」と改題して収録された。

“Uryuko” By Shimokawa Enji. Produced in April 1947
The subtitle is “On the Theme of Renunciation of War.” This
work was later included in *High School Theater Scripts*,
Vol. 3 (Hobunkan, 1956), edited by the Japan Theatre Arts
Association, under the revised title “A Defeat.”

田邊孝治氏旧蔵講談資料の研究

研究代表者：今岡 謙太郎（武蔵野美術大学造形学部教授）

研究分担者：佐藤かつら（青山学院大学文学部教授）、佐藤至子（東京大学大学院人文社会系研究科教授）、高松寿夫（早稲田大学文学学術院教授）、瀧口雅仁（恵泉女学園大学講師）

【研究目的】

故田邊孝治氏は、新潮社で長年編集者をつとめる傍ら講談研究を進め、雑誌『講談研究』を編集発行して資料紹介また研究成果を発表してきた。本研究は早稲田大学演劇博物館に寄贈された田邊氏旧蔵の講談関係資料の全容を解明することを目的とする。田邊氏が収集した講談関係の資料は多岐にわたるが、中でも昭和40年代～平成10年代にラジオで放送された講談の音声資料、また講師自身に取材した際に録音した音声資料、さらには田邊氏が主催した講談の会の録音した音声資料は他に類をみないと言ってよい。本研究では、音声資料の全容を把握しデジタル化を進めるところから出発し、録音された演目の目録化を進めている。

この作業を通じて昭和平成期に伝承された講談演目の特色、また講師自身の特色（伝承された演目、その芸風など）を明らかにする。同時に、デジタル化した音声資料の演目同定作業を進める。これらの作業を行いながら、近世期また近代期における文学との影響関係、落語等他の寄席芸との影響関係、歌舞伎演目との相互影響についても検討する。

【研究成果の概要】

2025年度の研究は、昨年に引き続き田邊氏旧蔵資料のうち音声資料のデジタル化及び演目の目録化を中心に進めた。研究協力者の協力を得ながらデジタル化作業を行い、演目の同定と演者別の目録を作成し、その作業を通して昭和～平成期の講談の口演傾向の分析をおこなった。現段階では仮目録に搭載のある887点のうち、およそ4分の3程度の点数を確認・デジタル化が完了している。これにより、これらの音源に関しては音質の劣化を心配せずに今後の調査・研究を進めることが可能になった。一方で残る約4分の1の音源に関しては確認・デジタル化が行われておらず、次年度以降の課題となる。また一方でデジタル化された資料の公開方法については著作権等との関連もあり、全面的な公開の用途はたっていないものの、研究目的での限定的な公開などの方法を模索しており。これも次年度以降の課題となる。

また、この作業を通して瀬戸内寂聴（晴美）が二代目神田松鯉を題材とした小説「花野」の取材音源が発見さ

れており、演目以外の面においても文学研究における講談の重要性を再認識することとなった。

一方、これと並行して行っている演目自体の確認・同定は、長編演目の一部が多く含まれているためもあり、副題等の設定またどの長編演目のどの部分であるかを同定することが困難な部分もある。この作業の進展に伴い、吉沢英明氏旧蔵の講談速記本を所蔵し、整理公開の準備を進めている大阪公立大学所蔵資料との比較検討の必要が必要になったため、2025年3月に代表者の今岡と協力者の菅野の二名が大阪公立大学を訪れ、田邊資料に含まれる音声資料と講談速記本との照合を行った。

実際の口演をもとにした本研究の調査結果は、近世文学、近代文学研究にも新たな視点を提示することになると考える。

また、これらの研究成果の一端を公開する場として、2026年1月27日に「文学研究と講談」と題した公開研究会を、また2026年2月7日に「田邊孝治氏旧蔵講談資料からみる講談の広がり」と題して、講談の実演を交えたシンポジウムを開催した。



2026年2月7日(土)
17:00~19:30
早稲田大学
大隈記念講堂小講堂
◆入場無料、当日参加可
(要事前登録)

「田邊孝治氏旧蔵講談資料の研究」
(早稲田大学演劇博物館演劇快挙学連携研究拠点)
主催シンポジウム

**田邊孝治コレクシオンと
講談の現在**

一龍齋貞徳



同時開催 公開研究会
「文学研究と講談」

- ◆日時：2026年1月27日(火) 14:00~17:00
- ◆会場：早稲田大学 戸山キャンパス 33号館3階 第一会議室
- ◆登壇者：赤井紀美（東北大学）、今岡謙太郎（武蔵野美術大学）、菅野孝介（東京大学大学院）、佐藤かつら（青山学院大学）、佐藤至子（東京大学）
- ◆開催方法：対面、オンライン併用

田邊孝治氏は新潮社で編集者をつとめる傍ら『講談研究』の編集発行に携わり、講談の本格的な研究の嚆矢をひらきました。田邊氏が収集した講談関係資料の内、音声資料の多くが早稲田大学演劇博物館に寄贈されましたが、そのコレクシオンには昭和40年代に放送された口演や田邊氏主催の講談会での口演などに類をみない音声が含まれています。本研究チームは田邊氏旧蔵資料の調査とデジタル化を行っており、この度その成果紹介を兼ねたシンポジウムを開催します。田邊コレクシオンと現在の講談との関係について、講談の実演も交えて考えてみたいと思います。

登壇者：一龍齋貞徳、今岡謙太郎（武蔵野美術大学）、高松寿夫（早稲田大学）、瀧口雅仁（演芸評論家・恵泉女学園大学講師）

参加申込・詳細はこちら 

お問い合わせ先 Mail: imaken@musabiac.jp (今岡)
※*を@に変えて送信してください

公開研究会・シンポジウムのイベントチラシ
Event flyer for the public research meeting and symposium

公募研究

5

常磐津節正本板元坂川屋が遺した印刷在庫の概要調査

研究代表者：竹内有一（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授）

研究分担者：鈴木英一（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、常岡亮（常磐津協会理事）、阿部さとみ（武蔵野音楽大学非常勤講師）、前島美保（国立音楽大学准教授）、重藤暁（江戸川大学情報教育研究所客員研究員）、小西志保（京都市立芸術大学共同研究員）

【研究目的】

坂川屋は、幕末の1860年に板株を常磐津正本板元の伊賀屋から受け継いで再刊を続け、以後昭和期まで新刊も行い、1987年頃まで板木で正本（稽古本）を刷り立てた板元である。この板元が旧蔵し演劇博物館に寄贈されて現存する「印刷在庫」群（刷り立てた正本の在庫および未成品、全47箱、点数は数万点か）が研究対象資料「坂川屋旧蔵常磐津節正本関連資料」である。

この唯一無二の資料群の整理、保存、デジタル化、公開を着実に進めるため、当該年度は、資料群全体の書誌的調査を行い、資料群全体を俯瞰する概要目録の作成を主要な目的とした。今後の精査によって、日本最後の板元ともいえる坂川屋の営為の実態に迫ることができるだろう。

【研究成果の概要】

(1) 資料収納箱の現況調査

演劇博物館へ収蔵後に付与された箱番号（大番号）が、1番から35番まで存在することを確認した。ただし、欠番が2つある。また、14個の箱に副番号が付与されている。副番号は、汚損した古い箱を更新する際、複数の小箱に分割した場合に付与されたい。箱の総数は47箱である。

(2) 箱内の梱包体ごとの書誌的調査、梱包番号（中番号）の付与、および目録作成

次に、すべての箱内の資料収納状況を調査した。1995年の事前調査時に、破損していた紐を交換したり、一部の資料の仕分けを変更した痕跡が残るが、おおむね、坂川屋閉業当時の梱包体がそのまま保存されている。

資料の大半は、常磐津稽古本の印刷在庫である。その調査概要と一部の写真は、昨年度のニューズレターに掲載した。そのほかに、袖珍稽古本の印刷在庫、題簽の印刷在庫、番組刷物の収集体、編集・印刷・販売等に関わる資料断片やメモ類が存在することを確認し

た。なお、1995年の事前調査で確認していた、幕末期の薄物正本と明治期の歌舞伎番付は、研究対象資料に含まれていないことを確認した。

資料の保存性を高め、目録作成と今後のデジタル化が円滑に進むよう、すべての資料について、元来の梱包体、または任意のまとまりごとに、中番号を付与し、目録を作成した。中番号の総数は約120件である。

(3) 番組刷物等の撮影、デジタル化

常磐津関係の番組等の刷物は、約150種あり、ほとんどが一枚刷である。未成品やメモ類も含まれる。坂川屋が受託印刷した刷物の在庫、関係者が坂川屋に付け届けた刷物が混在しているとみられる。研究代表者がかつて実施した実演家の経歴調査（『常磐津節演奏者名鑑』全8巻、常磐津節保存会発行、文化庁補助事業）において閲覧できなかった希少資料も少なくない。番組類の概要調査と目録作成は、来年度以降に行いたい。



1923年5月12日の番組刷物。会主は常磐津兼静。竹内有一編『常磐津節演奏者名鑑』第4巻によれば、兼静は女流中堅の浄瑠璃方で、1919年から1940年までの資料にみえる。この刷物は未調査の新出資料。資料番号 [50393 (27-01-09)]。

Program print from May 12, 1923. Tokiwazu Kaneshizu was the organizer. According to Takeuchi Yuichi (ed.), *List of Tokiwazu-bushi Performers*, vol. 4, Kaneshizu was a middle-ranking female *yoruri* performer, and is mentioned in materials from 1919 to 1940. This print is a new material that has not been studied before.

小沢昭一旧蔵資料にみる「日本芸能史」構想についての調査研究——芸能史叙述と「芸」「性」「差別」

研究代表者：鈴木聖子（大阪大学大学院人文学研究科准教授）

研究分担者：武藤大祐（群馬県立女子大学文学部教授）、垣沼絢子（立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員）、鶴飼正樹（京都文教大学総合社会学部教授）、京谷啓徳（学習院大学文学部教授）、瀬戸智子（神戸女学院大学国際学部准教授）

【研究目的】

小沢昭一旧蔵資料には、新劇俳優の小沢昭一（1929～2012）が出演したラジオ・テレビ・映画・演劇の台本、スクラップブック、公演パンフレット、写真、音響・映像メディア等の資料が収蔵される。本研究は、オープンリールテープとカセットテープに残された、1960年代後半の小沢によるインタビューを分析し、小沢が「芸」「性」「差別」と真摯に向き合い描こうとした「日本芸能史」を明らかにするものである。

【研究成果の概要】

本研究チームは、昨年度より、小沢昭一旧蔵資料所蔵の録音資料に残された、1960年代後半に小沢が芸能史の源泉を求めて「世の中からは蔑視、白眼視」されていた人々と語り合ったインタビュー録音のオープンリールテープのデジタル化（演劇博物館による）に関する検討と調査分析を進めてきた。

今年度は、主にカセットテープのデジタル化（演劇博物館と本チームによる）を進めた。新たにチームに加わった3名の研究分担者（鶴飼・京谷・瀬戸）と共に問題を深化させ、小沢のインタビューを各自の関心領域へ広げて分析した。8月にZoomで一堂に会して議論し、かつてのストリップ劇場や大衆演劇の劇場が、「さまざま人が引き寄せられるように集う「場」であった」様子が徐々に明らかになってきた（鶴飼）。担当の音源について、学術的な見地から内容を検討した報告書を演劇博物館へ提出し、今後の演劇博物館が音声資料の公開／非公開を検討する際に参考とできるよう努めた。

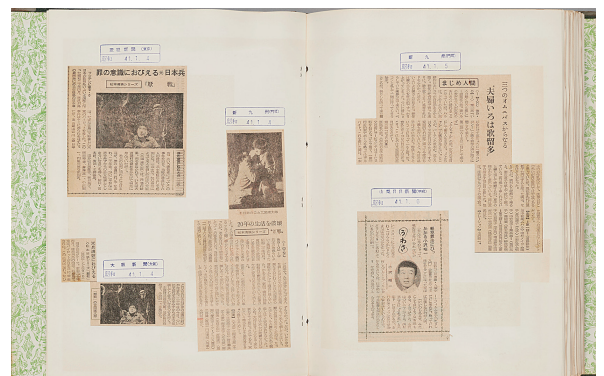
また、当初より本チームでは、博物館やアーカイブが、現在においても「反社会的」「公序良俗を乱すおそれのある」と判断されかねない内容や人権に配慮する必要のある内容を含む、「芸」「性」「差別」に関わるインタビューの音声資料を、どのように扱っていくことができるのか、という新しい問題を考察してきた。今年度の事例では、あるひとつのインタビューにおいて、小沢のインタビュー対象者が、とある著名な同業者のことを少し悪く言っているくだりがあり（小沢の著作ではこの部分はカットされている）、大変興味深いのが、プライバシーを侵害する可能性もあるため、公開には検討を要するで

あろうという結論に至った（武藤）。

昨年度と同様、音声資料についてはそのインタビュー対象者の職業が多岐に渡ることから、専門家に音声聞いて頂き、議論をする連携調査を試みた（瀬戸・鈴木・研究協力者の榎谷夏帆）。事例として、小沢が女子プロレスラーの小畑千代に行なったインタビュー音源を、小畑と近い関係にあった日本初の女子プロレスラーの猪狩定子氏に聞いて頂いた。その結果、猪狩氏には助言を頂けただけではなく、こちらから伺わずとも自然とご自身のことを話される方向へと進むなど、音声資料のもつ魅力が十分に発揮できた（瀬戸）。

昨年度に引き続き、音声資料の歴史的な脈を理解してアーカイブ化するため、小沢が業者に発注して制作されたスクラップブック資料（本ページ右下の写真）の詳細な目録の作成を進めた（研究協力者の下野歩による）。本チームでは研究会や会議やメールのほか、LINEグループを利用して意見交換していたが、その際、このスクラップブック資料がデータベースとして有機的に機能することが実証できた。

以上の成果を公開するため、各々が担当する録音資料について、解題と共に音声の一部を検討する研究会を調査地の道後温泉（愛媛）において2026年2月に開催。また、文化資源学会（事務局・東京大学）から要望があり、2026年10月の研究会において複数メンバーによる成果発表をする予定である（京谷）。



スクラップブックの一部 [51717]。この見開きのページには『産経新聞』『大阪新聞』『新九州新聞』『山梨日日新聞』に掲載された小沢自身に関する記事の切抜きが時系列に貼られている。

Part of the scrapbook. On this two-page spread, newspaper clippings about Ozawa that appeared in the *Sankei Shimbun*, *Osaka Shimbun*, *Shin-Kyushu Shimbun*, and *Yamanashi Nichinichi Shimbun* are pasted in chronological order.

奨励研究

本拠点では2020年度より演劇博物館の若手研究者を中心に今後の本拠点の共同研究の基礎調査を行う「奨励研究」を開始しました。2025年度も4件の研究課題が採択され、多彩な研究が行われました。

2025年度の研究課題として①「小山内薫関係資料の調査研究」(熊谷知子)、②「「沖繩もの」演劇の系譜に関する研究——社会的背景および他ジャンルの物語作品を参照して」(近藤つぐみ)、③「演劇博物館所蔵中国演芸貴重資料の目録作成(継続)」(李家橋)、④「植民地期の朝鮮映画と新派的感性——日本映画との比較を通して」(具珉炯)の

4件が採択された。各研究課題が学内外の研究者等と協力しながら、多岐にわたる膨大な演劇博物館の資料の調査・考証を進めた。成果の一部は演劇博物館の春季企画展「演劇は戦争体験を語り得るのか——戦後80年の日本の演劇から——」、秋季企画展「日中演劇交流展—欧陽予倩・田漢と日本」などで発表された。

拠点主催事業

本拠点は、文部科学省からの機能強化支援(2016~2018年度)以降、本拠点主導により、国内外の研究機関や民間企業と連携して行う共同研究事業を積極的に行っています。

活動写真弁士の皆さんによる「声色掛け合い」と和洋合奏団「カラード・モノトーン」による『無声映画 活弁上映会』

2025年9月12日、尾上松之助遺品保存会との共催で、尾上松之助生誕150年記念・松田春翠生誕100年記念の特別上映会として「活動写真弁士の皆さんによる「声色掛け合い」と和洋合奏団「カラード・モノトーン」による『無声映画 活弁上映会』を開催した。

第一部では、山崎バニラ氏による「豪傑児雷也(マツダ映画社所蔵)」大正琴弾き語りや、片岡一郎・坂本頼光・山城秀之・山内菜々子の弁士4名と、和洋合奏団カラード・モノトーンによる「雷門大火・血染の纏(演劇博物館所蔵)」

が上映され、児玉竜一館長により「御台覧劇(神戸映画資料館所蔵)」「松之助葬儀実況(国立映画アーカイブ所蔵)」の記録映画の上映と説明が行われた。

第二部では、国立映画アーカイブの入江副館長により「松之助劇と声色掛け合い」についての講演が行われ、本企画最大の目玉である12人の弁士と楽士総出演による「渋川伴五郎 霧島山蜘蛛退治の場(マツダ映画社所蔵)」声色掛け合いが行われた。普段なかなか見ることができない内容で、圧倒的な迫力に会場内が大いに沸いていた。



「渋川伴五郎 霧島山蜘蛛退治の場」声色掛け合い
A dramatic dialog of “Shibukawabangoro
Kirishimayamakumotaijinoba” by benshi performers

国立映画アーカイブ共催事業

本拠点では、2018年度より行っている演劇博物館所蔵のサイレント映画を用いたかつての多彩な上映スタイルを「再現」する試みを、昨年度より国立映画アーカイブとの共催事業として発展させました。

シンポジウム

映画と義太夫——義太夫出語り上映を再現する

サイレント時代の日本では弁士の語りだけでなく多彩な声の文化が映画上映を演出していた。当拠点は2018年度以来、演劇博物館所蔵のサイレント映画を用い、かつての多彩な上映スタイルを「再現」する試みをおこなっている。今年度は、国立映画アーカイブとの共催事業に発展させ、義太夫入りの上映に光を当てた。

本イベントは、サイレント時代に弁士として活躍した大蔵貢が戦後に行った義太夫出語り上映の音声記録をもとに、いま改めて義太夫出語り上映を試みるうえでの課題やその可能性を検証したワークショップ「映画と義太夫——旧劇映画の声と音」（2024年5月7日開催）に続くもので、

鶴澤津賀寿氏（女流義太夫三味線方）、竹本京之助氏（女流義太夫太夫）のご協力を得て、旧劇映画の女流義太夫による出語り上映を試みた。

第一部では、今回の趣旨である義太夫出語り上映について富田美香氏（国立映画アーカイブ主任研究員）、柴田康太郎氏（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）に解説いただいた。富田氏が「明治～大正初期の東京・大勝館とその周辺」、柴田氏が「大正期の札幌における「義太夫物」映画上映」と題して、主に上映に関する時代背景についてお話が

あった。その後児玉竜一館長による作品解説をふまえて、国立映画アーカイブ所蔵『旧劇 太功記十段目 尼ヶ崎の場』（1908年）、同館所蔵『朝顔日記』（1909年）の二作品が、鶴澤津賀寿・竹本京之助両氏の実演付で上映された。

第二部では、児玉竜一館長を進行役に、鶴澤氏、竹本氏の3名によるトークセッションが行われた。

義太夫出語り上映に関する歴史的背景のみならず、今回の企画にあたっての裏話なども披露され、笑いの絶えないトークが繰り広げられ、大いに会場を沸かせた。



「映画と義太夫——義太夫出語り上映を再現する」トークセッションの様子
左より：児玉竜一館長、鶴澤津賀寿氏、竹本京之助氏
Talk session on "Cinema and *Gidayu*: Reconstructing Screenings with Onstage *Gidayu* Accompaniment"
From the left: Prof. Kodama Ryuichi, Tsurusawa Tsugaju, Takemoto Kyonosuke

海外の大学研究機関との連携事業

本拠点では新型コロナウイルスの感染拡大以降もオンラインツールを活用しつつ海外の機関との研究交流を積極的に行っており、今年度も充実した成果をあげました。

日英対談

歌舞伎とシェイクスピア上演の過去・現在・未来 第三弾

日本で最初にシェイクスピアの全作品を翻訳した坪内逍遙により設立された演劇博物館では、シェイクスピア研究の世界的拠点であるシェイクスピア研究所を擁するイギリスのバーミンガム大学と研究協力体制を築いてきた。昨年度に引き続き、シェイクスピア研究所教授のティファニー・スターン氏をお招きして日英対談「歌舞伎とシェイクスピア演の過去・現在・未来 第三弾」を実施した（2025年12月1日、オンライン、非公開）。対談の相手は早稲田大学文学学術院教授・演劇博物館長で歌舞伎を専門とする児玉竜一が務めた。

本企画の目的は、シェイクスピア劇と歌舞伎研究において、上演という「残らないもの」に如何にアプローチし再

現し得るか、お互いの研究に資する情報交換を行うことで、将来的な日英演劇比較研究の基盤づくりを目指すことである。両分野においてどのような資料が残っているのか、それらからどのような上演や資料を復元・再現し得るのか、戯曲そのものについてではなく、かつてあったはずのもの（上演）をどうしたら再現、比較し得るかの情報交換を行う。対談第三弾となる今回は役者ではなく、人形や道化、音楽家などに焦点を当て、①人形、道化や音楽家について学ぶ（知る）ことができるのはどのような資料や文書なのか、②音楽演奏そのものについて、後世の作品や現存する資料から歴史的な実践（過去の上演）を推測、想像することができるか等について対談を行った。対談の採録は本拠点のウェブサイトにて公開する予定である。

くずし字判読支援事業

本拠点では 2016 年度以来、TOPPAN 株式会社との共同で「くずし字判読支援事業」を行っています。

演劇博物館は江戸時代の貴重な浄瑠璃丸本の充実したコレクションを誇るが、これらの資料は漢字をくずした「くずし字」の中でも独特な書体で描かれているために判読が困難である。しかし資料自体は古典芸能研究においてきわめて有用であるため、それらの資料を若手や海外の研究者の利用にも広く供するという目的のもと、本事業では「くずし字 OCR」の構築作業を行ってきた。

今年度は、「くずし字 OCR」を活用した総合的古典籍データベースを拡充するため、過年度に作成した浄瑠璃丸本「菅原伝授手習鑑」の文字譜データベースを新たに作成、また、これまでに公開した字形データセットの内容を精査し、より正確なデータベース公開に向けて修正、更新を実施した。これらの成果は本拠点ウェブサイトおよび早稲田大学文化資源データベースに公開予定である。

演劇・映像資料の利活用を図る事業

本拠点では、演劇博物館の貴重かつ多彩な所蔵資料を保全しつつ広く一般に供するため、資料のデジタル化とデータベース化を積極的に進めています。

資料のデジタル化

本拠点では、演劇博物館の所蔵資料のデジタル化を積極的に進め、その資料の利活用方法の可能性を広げる取り組みを行っている。今年度は、演劇博物館の所蔵資料から、小沢昭一や田邊孝治氏旧蔵の音声資料などを中心にデジタル化を行った。これらのデジタル化された資料は、その資

料を研究対象とする共同研究チームに供され、研究活動の推進に大きく貢献した。また、過去にデジタル化したサイレント映画などの映像資料を活用する事業を今年度も継続し、今年度も国立映画アーカイブとの共催事業へと発展させた（詳細は 14 ページ参照）。

過年度共同研究成果のデータベース化

本拠点では、「テーマ研究」や「公募研究」といった共同研究事業を通じてデジタル化・目録化された資料を早稲田大学文化資源データベースにて公開することで、演劇・映像資料の基礎研究のためのアーカイブを拡充し続けている。演劇博物館の設立者である坪内逍遙は執筆上演のために集めた資料や下絵、装置図等の貼込帖を作成し、同館に寄贈した。「長生新浦島」、「変化雛」（へんげびな）に続き、今年度は「お夏狂乱」の貼込帖のデータを「坪内逍遙作上演劇材料貼込帖データベース」の一部として公開準備

を行った。このデータベースは、2014・2015 年度演劇映像学連携研究拠点における公募研究、2016～2019 年度同テーマ研究課題「坪内逍遙・坪内士行資料の基礎的調査研究」（研究代表者：濱口久仁子）の調査研究成果の一部である。横長大判の貼込帖に収められた様々な資料は逍遙の創作の跡をたどるうえで、また上演の記録として貴重であり、今後も本データベースを拡充していく。その他共同研究による成果として、未公開データベースについても公開準備を行っている。

2020年度～2025年度外部評価

早稲田大学演劇博物館 演劇映像学連携研究拠点では、今年度が3度目の認定期間の最終年度となります。そのため2020（令和2）年度からの6年間の活動についての外部評価を3名の外部評価委員に行っていただきました。以下、それを全文掲載します。

外部評価委員 明治学院大学文学部芸術学科教授 斉藤 綾子

前回の外部評価ではパンデミック下で異例の展開になったにもかかわらず、演劇映像学の研究拠点として「特別テーマ研究」を展開するなど様々な工夫をこらして充実した成果を上げたことが確認された。後半となる2023年から2025年の3年間はポストコロナとも呼べる状況の中で、少しずつ本来の拠点事業としての活動が戻ってきたと思われる。まず、主催事業ではポストコロナにおける舞台芸術のあり方の検討、国内外の民間企業や研究機関との緊密な連携、デジタル資源と技術の活用可能性の開拓を軸として、前者の二つではシンポジウムやワークショップなどを開催した一方で、資料の公共性を高めるために非常に重要な作業である資料のデジタル化プロジェクトも堅実な進展が確認された。地味で時間のかかる作業だがポストコロナと芸術活動というテーマは主催事業としていつまで継続するのかという問題はあるが、残りの二つは長いスパンで継続することが極めて重要だと思われる。

また、コロナ禍では「テーマ研究」の数が減っていたが、2025年度では5つにまで増えたことは拠点としての活動がコロナ前の水準まで戻ったことを示している。2025年3月の時点で、「テーマ研究」では、久保栄関連資料、倉林誠一郎旧蔵資料、映画関連資料、タイニイアリス小劇場関連資料、前田直資料を対象とする5件を、また、「公募研究」では、岡本綺堂旧蔵資料、二代目市川團十郎栢莚日記、九州地区劇団占領期GHQ検閲台本（デザイナー・コレクション）、田邊孝治氏旧蔵資料、蔵常磐津節正本板元坂川屋関連資料、小沢昭一旧蔵資料を対象とする6件、「奨励研究」では小山内薫の演劇活動、「沖縄もの」演劇の系譜、博物館所蔵の中国演芸貴重資料、植民地期朝鮮映画と新派的感性の比較という4件が採択された。いずれも、占領期

を含む近現代という歴史的スパンを持ち、歌舞伎、新劇、寄席・芸能、映画と領域も多岐にわたり演劇映像学の拠点として充実している。また九州や沖縄、中国、朝鮮といった地域的にも広がりが見られ、公募研究と奨励研究という棲み分けが順調に機能している点も評価したい。

加えて、前回に比べて研究者の多様化も進み、さまざまな大学や機関やベテランと若手の研究者がチームを組んで研究に取り組んでいる印象が強い。資料の特殊性や研究の専門性を考えると決して容易ではないとは察するが、運営体制の健全な遂行を反映していると思われ、こちらも拠点事業にふさわしいと評価したい。

なお研究の内容自体に関するのではなく、また些末な点でもあるが、研究課題申請書は継続する研究がいくつかあり、その中で基本的には研究計画や方法に変更が見られないものもあると思うが、年度ごとの申請書の記述がほぼ同じものがいくつか見られた。少なくとも前年の研究成果などが反映された内容になっているべきではないかと思われた。実際に研究報告で確認すると年度ごとに成果があるので問題はないが、やはり申請書も前年の成果を入れ込んだ明確な記述が望ましいと思う。

全体として、研究者によって若干のばらつきはあるが、学会発表や論文投稿も含め、成果発表も順調に行われ、しっかりと研究拠点として機能を果たしている。奨励研究は成果が出るのが時間的にズレが生じてしまうこともあると思うが、今後も順調に若手研究者を応援してほしい。個人的には、専門に近いUCLA-早稲田-柳井イニシアティブとの連携イベントや京都芸術大学と連携したサミュエル・ベケット映画祭などが特に印象に残った。今後もますます充実した活動を期待したい。

本拠点の第3期(2020-2025)は、感染症拡大という世界的危機のただ中で開始されたが、その制約を単なる障害としてではなく、研究課題および方法論の再構築の契機として捉えた点に大きな特徴がある。オンライン展示・配信型上映会・国際シンポジウムへの迅速な移行は、事業継続のための応急的措置にとどまらず、国際シンポジウムやオンライン上映会などを通じて、上演の不在や舞台芸術の社会的条件そのものを研究対象に組み込む契機となった。これは、演劇を単なる上演芸術としてではなく、社会的・歴史的アーカイブとして再定義する姿勢の表れであり、博物館型研究拠点としての特質が強く発揮された局面であったと評価できる。

研究面では、テーマ研究・公募研究・奨励研究を組み合わせた制度設計が安定的に機能している。寄贈資料の体系的整理と未刊行作品の撮影・分析が進められ、特別展や公募研究との関連事業へ展開し、国内資料研究を国際的文脈へ位置づけている。さらに、科研プロジェクトとの接続を通じて研究基盤の拡張も展開している。これらは単年度成果にとどまらず、複数年にわたり資料整理と研究深化を重ねている点で、演劇資料研究の持続的基盤形成という観点から重要である。

対象領域の多様性も顕著である。近世演劇資料研究、映画興行史研究、占領期劇場研究、戦後新劇資料研究など、一見異なるテーマ群は、「未整理資料の可視化」「草稿・上演資料の精査」「上演史の再構築」という共通の方法論的志向を共有している。成果報告書や学会発表実績からは、研究が実際に論文、報告、展示、国際発表へと結実していることが確認でき、形式的な体制ではなく実質的活動が継続していると判断できる。

国際研究交流も、中国(中央戯劇学院・田漢基金会)、米国(UCLA Film & Television Archives)、英国(ナショナル・シアター関連事業、University of Birmingham)、フランス(国立舞踊センター)など複数地域との具体的協働が継続されており、単なる招聘型交流ではなく、展示・公演・シンポジウム・科研連携にわたる実質的ネットワークが形成されている。コロナ禍においてもこれらの交流を維持し、対面再開後も継続している点は、拠点の柔軟性と持続性を示すものである。

連携先への貢献という観点でも、拠点は資料提供・研究設計・成果公開の中核を担っている。寄贈資料の整理・撮影・公開は、共同研究者や外部機関にとって利用可能な研究基盤の整備を意味し、知的資源の社会的共有という点で高く評価できる。若手研究者や大学院生の参画を制

度的に組み込み、奨励研究を通じて研究ネットワークへ接続する機会を提供している点も、次世代育成への具体的貢献として重要である。運営面では、予算執行は概ね安定し、資料撮影費・研究補助費等が計画と整合的に確保されている。

一方で、今後の発展に向けた課題もあろう。第一に、テーマ研究・公募研究・奨励研究の三枠組みは制度として整備されているが、実際の取組内容を見ると、資料調査・研究会開催・成果報告という点で類似した運用になっている傾向に見える。それぞれの枠組みの本来の趣旨(テーマ研究=拠点の中核的長期課題、公募研究=新規性・外部連携の強化、奨励研究=若手育成と実験的課題の推進など)をより明確に打ち出し、成果公開の形式や評価指標に差異を設けることで、制度設計の強みを一層活かす可能性がある。第二に、主催事業の質的波及効果の可視化が今後一層に期待される。第3期においては、企画展や国際シンポジウム、オンライン上映会など、多様な主催事業が実施され、参加者数・視聴数の面では高い成果を上げている。しかし、これらの事業がその後どのような研究成果(査読論文、共著論文、科研申請、共同研究の発足、データベース利用件数の増加等)へと結実したのかを、体系的に追跡・提示する仕組みは、現段階ではいまだ開発の余地があるように思われる。例えば、展示関連論文の刊行状況、シンポジウム登壇者による共同研究の成立、上映会資料の学術利用件数などを中長期的にフォローする枠組みを設けることで、社会還元事業と学術成果創出との因果的連動を明示できるだろう。これは単なる広報強化ではなく、拠点の研究的生産性を定量・定性両面から示す基盤整備という意味を持つ。第三に、個別研究成果を拠点全体の横断的到達点として示すことも今後の課題としてあるように思われる。第3期では、戦前の新劇、戦後演劇を問わず広く、多様な資料基盤型研究が展開されたが、それぞれが蓄積した整理方法、撮影基準、目録作成法、デジタル保存形式などを、拠点として共通化・標準化する取り組みは可能性が開かれている。例えば、共通メタデータ設計指針の策定、資料デジタル化の長期保存戦略の明文化、横断的成果集の刊行、あるいは5年間の研究成果を統合したポータルの公開基盤の整備などが考えられる。これにより、個別研究の蓄積が単なる並列的成果にとどまらず、「演劇資料研究モデル」として理論的にも制度的にも提示可能となろう。次期に向けては、こうした横断的整理と公開戦略の明示が、拠点の国際的プレゼンスを一層強化する鍵となるだろう。

2020年から2025年の困難な時期においても早稲田大学坪内博士記念演劇博物館が運営する演劇映像学連携研究拠点は、多方面の活動で目覚ましい成果を挙げてきた。

1. 新規収蔵コレクションの整理と活用

演劇映像学連携研究拠点は主に二つの極めて効果的な研究プラットフォームを創設し、主なプラットフォームには、演劇博物館や日本の他の多くの機関の熟練研究者による主要な研究と特別な研究が含まれている。このプラットフォームは、より広範囲の演劇・映画データコーパスから特定の要素を取り上げて掘り下げる独自性の高い研究テーマを考案している。演劇博物館に集められた芸術家のコレクションを基盤とした資料は整理され、デジタル化された上で研究へ活用されている。

ここでは、2024年に開始された20世紀の新劇の創出と活動を検証する研究プロジェクトの中から、特に注目すべき二つの事例を取り上げた。一つのチームは、演劇博物館が所蔵する久保栄コレクションに含まれる未整理・未公開資料の調査・転写・検証を行っている。久保栄(1900-1958)は築地小劇場の重要な劇作家・演出家であり、同劇場の創設者である小山内薫と土方与志の芸術理念を引き継ぎ、それを確立させた人物で、戦前・戦後を通じて新劇団体の芸術指導者として活躍した。また、このチームは資料の整理・デジタル化を進める過程で、築地小劇場に関する極めて興味深い複数の展示を手がけている。もう一つのチームは、戦前・戦後を代表する新劇劇団・俳優座に所属した倉林誠一郎のコレクションを検証している。倉林誠一郎(1912-2000)は戦後の新劇界における最も重要なプロデューサーの一人であり、俳優座劇場の建設を主導し、1981年には同劇場の代表理事に就任した人物である。その活動は、新劇に「プロデューサー」という概念を導入するうえで決定的な役割を果たした。初期の新劇については、久保栄の脚本と演出を手がかりにその芸術的基盤の確立を検証し、後期の新劇については、制作体制の構築を分析し、倉林誠一郎の日記の研究により解明している。これらの研究は相互に補完し合い、新劇を総合的に理解するための重要な成果を生み出している。

2. プロジェクトの更なる展開

二つ目のプラットフォームである「奨励研究」は、演劇博物館の若手研究者によって進められ、同館のコレクションに不可欠な基礎的な研究を行った。研究者たちは同館所蔵資料を精査し、特定のテーマに焦点を当てることで、人物・主題・ジャンルに関する後続研究を支える確かな基盤を構

築している。注目すべき点は、各プロジェクトが継続的に発展し、変化を伴いながら相互に影響し合っていることである。

同館による太田省吾資料の調査と展示公開の後、太田が晩年に所長を務めていた京都芸術大学舞台芸術研究センターの「舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点」との新たな共同プロジェクトが立ち上がり、展示に関連した複数のイベントが展開された。

更に太田省吾の独自の演劇手法を探るシンポジウムが開催され、能の「静」と「緩慢」と深い関わりをもつ作品『小町風伝』と『水の駅』の上映とトークイベントも行われた。また、太田省吾作品を対象とした研究会によって彼の作品の現代に果たす意味が再評価された。また、韓日共同プロジェクト『更地』や、韓国芸術総合学校で上演された『水の駅』の制作を通して、太田省吾の国際的な影響力についての考察が行われ、その一環として、『更地』で「女」役を務め、『水の駅』の演出も担当した韓国人俳優キム・スギ氏へのオンライン・インタビューが実施された。この共同プロジェクトは、演劇博物館における太田省吾作品資料の予備的調査と展示に続き、研究対象となった資料への理解を深め、その成果を社会に発信するうえで極めて有意義な取り組みとなっている。

3. アーカイブと研究の相乗効果

演劇映像学連携研究拠点の活動で最も重要なのは、アーカイブ機関である演劇博物館との緊密な協力関係である。同拠点は既存資料の調査、様々な基礎知識の整理と統合、新たな研究の創出、さらに演劇博物館のデータ整備など多角的な取り組みが進められている。2020年から2025年にかけて進められたこれらの課題は、2009年に設置された同拠点が演劇博物館の活動において極めて重要な役割を果たし、今後の演劇映像研究に不可欠な基盤として活性化させてきたことを明確に示している。

4. 今後の発展に向けて

過去6年間に、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館が運営する「演劇映像学連携研究拠点」が生み出してきた数々の独創的な成果に触れ、今後もこうした活動が継続されることを強く望んでいる。これらの取り組みは日本文化にとって極めて重要であり、国内外の研究者や学生が日本の演劇・映画文化を理解し、世界へ発信していくための確かな基盤を築いている。私は演劇映像学連携研究拠点の継続と更なる発展を強く支持する。



Mission and Vision

Leader of the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts

Kodama Ryuichi

The Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, which is operated by the Theatre Museum, has been in operation since AY2009 as a Joint Usage and Research Center, a status granted by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT). The unique feature of this Center is its collaboration with its parent organization, the Theatre Museum, having a collection of more than one million materials, to contribute to joint research on valuable unreleased/undisclosed materials that have not been adequately put to academic use.

Specifically, through four types of joint research projects, the Center promotes multifaceted, advanced research activities by diverse researchers in fields other than theater and film studies as well. Principal Research involves joint research projects on themes and materials proposed by the Center. Selected Research comprises joint research projects that accept public applications to conduct research on the Theatre Museum's unreleased/undisclosed materials. Encouragement Research focuses on young researchers affiliated with the Theatre Museum, who conduct studies on materials as the foundation for future joint research. Finally, Organized Projects include joint research projects led by the Center in collaboration with research institutions and corporations in Japan and abroad.

AY2025 marked the compilation of the results of the joint research teams' activities, which had been approved for 2 years. A total of 11 joint research teams (3 Principal Research teams and 6 Selected Research teams continuing their activities, as well as 2 Principal Research teams that were additionally selected this academic year) compiled their research results and disseminated them widely within and outside Japan through public research meetings and the publication of databases of relevant materials.

Four new research projects were selected for the Encouragement Research program this academic year. In cooperation with researchers from within and outside the university, the Theatre Museum's vast and diverse collection was researched and investigated, exploring various themes. These themes included the examination and organization of materials related to Osanai Kaoru—who was active as a director, playwright, and novelist from the late Meiji period to the early Showa period—research

on the genealogy of *Okinawa-mono* theater based on the Battle of Okinawa and Okinawa's history, the creation and publication of a catalogue of rare Chinese performing arts materials, and a comparative analysis of *shinpa* films in both Japan and Korea. Some of the results were presented at the Theatre Museum's spring exhibition, "Can Theater Convey the Experience of War?—80 Years of Japanese Postwar Theater," and fall exhibition, "Sino-Japanese Theatrical Exchange: Ouyang Yuqian, Tian Han, and Japan."

Organized Projects continued to develop around: (1) close collaboration with corporations and research institutions in Japan and abroad and (2) exploration of potential digital resources and technology. In relation to (1), two events were held to continue the activities of the last academic year. In July, a symposium was held in collaboration with the National Film Archive Japan (NFAJ); at the symposium, an attempt was made to screen two films: *Asagao Nikki* from the Theatre Museum's collection and *Kyugeki Taikoki Judanme: Amagasaki no Dan* from the collection of the NFAJ, accompanied by *joryu gidayu*. In September, a "Silent Film Screening with *Benshi* Narration" was held in collaboration with the Onoe Matsunosuke Heritage Preservation Society; the screening featured dramatic dialog by *benshi* performers and music by Colored Monotone, an ensemble that uses a mix of Western and Japanese instruments. International research exchange also made continuous progress. As a collaborative project with the University of Birmingham, an online Japan-UK dialog on materials and methods in Shakespeare studies and Japanese theater studies was held for the third consecutive year. In relation to (2), the Center is preparing to publish a database of unreleased materials digitized and cataloged through joint research projects such as Principal Research and Selected Research, as well as other joint research results, on the Waseda University Cultural Resources Database, which will serve as an archive for basic research on theater and film materials, with a view to preserving and sharing valuable materials.

The Center will continue to make use of abundant research materials and digital technologies possessed by the Theatre Museum to serve as a hub for joint research in the field. We appreciate your ongoing support and cooperation.

○ Principal research

The principal research involves a joint research project on the theme proposed by the Center, which researchers were encouraged to participate in.

Principal research

1

Survey of Kubo Sakae Materials

Principal Researcher: Abe Yukako (Professor, Faculty of Arts and Letters, Kyoritsu Women's University)
Collaborative Researchers: Akai Kimi (Associate Professor, Graduate School of Arts and Letters, Tohoku University); Kumagai Tomoko (Research Assistant, Waseda University Theatre Museum); and Fujisaki Kei (Meiji University Graduate School)

Research Objectives

This study organizes, examines, and investigates unorganized and unpublished materials in the Theatre Museum's Kubo Sakae Collection. Kubo Sakae (1900-1958) was a playwright and director who led the world of Japanese *shingeki* (new drama) from prewar to postwar Japan. The project particularly focuses on his relationship with Tsukiji Shogekijo. In 1926, Kubo entered the literary department of Tsukiji Shogekijo and studied theater under Osanai Kaoru and Hijikata Yoshi; after Osanai's death, he produced a series of masterpieces. Kubo's experiences at Tsukiji Shogekijo and the influence of Osanai were significant in his creative activities. By examining these experiences, we believe that we can solidify the foundation for basic research on Kubo Sakae based on primary sources.

Summary of Research

Kubo Sakae was involved in the activities and founding of various *shingeki* theater troupes. He was a writer who occupied a major position in the *shingeki* world before and after World War II. However, currently, research on Kubo Sakae can hardly be said to be making progress. The Theatre Museum received a vast collection of materials donated by Kubo's adopted daughter, Kubo Masa. These materials, which are largely unorganized, require urgent organization to serve as a basis for research on Kubo Sakae.

In the last academic year, we sorted and organized various mixed materials, which were then cataloged focusing on manuscripts, notebooks, and letters in Kubo Sakae's handwriting. This academic year, while continuing these operations, we began to sort and organize miscellaneous materials that are difficult to classify.

These materials were a mix of newspaper clippings, notes, fragmented diaries and schedules, photographs, letters, rights-related documents, and more. Much time was devoted to individually examining each material and considering preservation methods and cataloging.

Through this organization process, a number of valuable materials were discovered, including materials related to Osanai Kaoru, Kubo Sakae's mentor, and

a diary that Kubo kept during his final years, while recuperating from illness. Among the materials related to Osanai Kaoru were a menu (signed by Osanai) for a farewell party held at Mon Ami in Ginza before Osanai traveled to Moscow in 1927 and a postcard dated December 2, 1927, sent from Moscow to members of Tsukiji Shogekijo. The postcard included words of appreciation for the troupe members and plans to see a performance of Romashov's *The Soufflé* (*Kukimanju*), and described Osanai's vibrant experiences during his stay in Moscow. The fact that Kubo carefully preserved the menu and other materials signals the importance of Osanai's presence in his life.

Project team member Kumagai Tomoko also reprinted and introduced postcards from Osanai Kaoru held by the Theatre Museum (see Kumagai Tomoko, "Introduction of Materials: Postcards from Osanai Kaoru (addressed to Osanai Tomeko)," *Studies in Dramatic Art*, No. 49). It is our hope that these materials, when examined together with other existing materials in the collection, will contribute to the development of research on Osanai Kaoru.

After organizing and investigating the Kubo Sakae materials and examining their relationship with Tsukiji Shogekijo, Akai Kimi, Kumagai Tomoko, and Fujisaki Kei presented their findings in a panel session entitled "*Shingeki* and Performances as Seen in the Waseda University Theatre Museum Collection," held at the 2025 National Conference of the Japanese Society for Theatre Research, Hiroshima University Higashihiroshima Campus, on June 22, 2025 (the panel discussion was led by the Theatre Museum director Kodama Ryuichi).

In an attempt to present *shingeki*-related materials held by the Theatre Museum from the perspective of "performances," Akai examined wartime touring theater using letters from the Kubo Sakae Collection and materials from the Cabinet Intelligence Bureau. Based on Tsukiji Shogekijo's sales receipts, Kumagai clarified the aspect of Tsukiji Shogekijo's performances as a theater company, and Fujisaki discussed Tsukiji Shogekijo as a theater. Principal researcher Abe Yukako joined also the discussion.

Research on Postwar *Shingeki* with a Focus on the Kurabayashi Seiichiro Collection

Principal Researcher: Goto Ryuki (Research Fellow, The Edogawa Rampo Memorial Center for Popular Culture Studies, Rikkyo University)

Collaborative Researchers: Kamiyama Akira (Emeritus Professor, School of Arts and Letters, Meiji University); Kodama Ryuichi (Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University; Director, Theatre Museum); Yoneya Naoko (Cultural policy and arts management advisor); and Fujiya Keiko (Librarian, Waseda University)

Research Objectives

Kurabayashi Seiichiro (1912-2000) joined the Haiyu-za Gekidan Theater Company in 1946, shortly after Japan's defeat in World War II. He founded the Haiyu-za Theater in 1956 and was appointed its CEO in 1981. In 1965, he was instrumental in establishing Japan's first unified body of performance artists, the Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations (Geidankyo). This organization significantly influenced the protection of performers' rights, cultural activities, and policy advocacy in performing arts.

This study aims to reassess Kurabayashi Seiichiro as a theater producer through research and examination of diaries, scrapbooks, memos, notebooks, letters, and other materials in the Kurabayashi Seiichiro Collection, and lays the foundation for basic research on postwar *shingeki*. The importance of the "theater producer," defined by Kurabayashi himself as "existing between the creative organization and the audience, and playing an important role in objectively and correctly understanding the positions and ideas of both parties and communicating them to each other" (*The Theatre Producer*), cannot be overlooked when considering audience theory in the theater. However, producers have not yet been considered as a subject of research. By clarifying Kurabayashi's achievements, this project aims to measure the influence of the producers who actually managed theatre venues and put on performances; open up perspectives on theatrical (historical) research not limited to the viewpoints of writers, directors, actors, and other creatives; and clarify the multifaceted nature of postwar *shingeki* performances, among others.

Summary of Research

This academic year, we continued transcribing the 79 volumes of diaries written by Kurabayashi Seiichiro from June 1947 to March 2000. Among these diaries, we transcribed and reviewed those written from 1947 to 1952, during the Occupation period. Project members are working on a book entitled *The Diaries of Kurabayashi Seiichiro: The Occupation Period*, which will be published in 2026, along with explanatory notes, discussions, and more. These diaries will contribute to

the study of postwar *shingeki* (theater), and through Kurabayashi's detailed descriptions of the behind-the-scenes of performances, will vividly convey the realities not only of *shingeki* but also of theater and film during the Occupation period.

Furthermore, the project held a public research meeting entitled "Aspects of Sino-Japanese Cultural Exchange and Theatre: Postwar Theatrical Materials and Their Context" (October 21, 2025). Kurabayashi Seiichiro was part of a Japanese theater delegation to China (1957) and the first *shingeki* theater troupe to visit China (1960) as director general. The Theatre Museum received a donation of materials related to these activities. The second (1965) and third (1981) *shingeki* theater troupes to visit China, led by Senda Koreya and Sugimura Haruko, went on to stage a variety of plays. Postwar *shingeki*-related materials were exhibited in conjunction with the Theatre Museum's 2025 Fall Special Exhibition, "Sino-Japanese Theatrical Exchange: Ouyang Yuqian, Tian Han, and Japan," as evidence of theatrical exchange between Japan and China. The exhibition also provided an opportunity to consider various roles that theater played in cultural exchange between these two countries.

First, Kumagai Tomoko (Research Assistant, Theatre Museum) gave an overview of the exhibition on "Sino-Japanese Theatrical Exchange" and reported on the exhibited materials. Next, Goto Ryuki introduced materials from the Kurabayashi Collection related to *shingeki* theater troupes visiting China, adding that the anti-US movement against the Security Treaty had a significant influence on solidarity between Japanese and Chinese cultural figures. Following these activities, theater critic Ozasa Yoshio took the stage, with Theatre Museum director Kodama Ryuichi serving as interviewer. Ozasa talked extensively about the realities of the time, aspects of Sino-Japanese theatrical exchange, and present-day issues.

The diaries written after the Occupation period date back to the construction and opening of the Haiyu-za Theater (closing in 2025). Additionally, we will be seeking opportunities to conduct research on materials other than diaries.

Research on Prewar Film Screenings Using Film-Related Materials

Principal Researcher: Okada Hidenori (Chief Curator, National Film Archive of Japan)

Collaborative Researchers: Kamiya Makiko (Part-Time Lecturer, Department of Imaging Arts and Sciences, Musashino Art University); Shibata Kotaro (Part-time lecturer, Faculty of Music, Tokyo University of the Arts); and Shirai Fumito (Associate Professor, Faculty of Business and Commerce, Keio University)

Research Objectives

This study examines movie theater screening programs, *benshi* performers' and musicians' practices, and changes in film distribution methods by analyzing film promotional materials, mainly movie theater flyers in the Theatre Museum's collection, from the dawn of cinema to the prewar period. The purpose of this analysis is to clarify various aspects of Japanese film distribution and exhibition in the same time period which have yet to be sufficiently historically contextualized.

This academic year, while building on the results of Selected Research conducted since AY2020, the team expanded the scope of research to include the Komada Koyo Collection, which has a complementary relationship with movie theater flyers, aiming to conduct a more comprehensive study and publish the results.

Summary of Research

This academic year, the team continued to develop a new catalog of materials and publish the results of research activities to date. First, as in the last academic year, we conducted a survey of materials that will serve as the basis for this research. In particular, we began to catalog and analyze two of the six Komada Koyo scrapbooks held by the Theatre Museum, which had not been previously examined. Although it will take some time to catalog and refine the information on these flyers, we plan to further analyze the materials, including scraps of flyers and newspaper articles from the Taisho period that overlap with the movie theater flyers examined by the team.

As the culmination of 2 years of activities, the team worked to "reconstruct" a *biwa* film screening for the second time since 2023. This year's screening was

accompanied by *satsuma biwa* player Kawashima Nobuko, film narrator Kataoka Ichiro, and Japanese traditional percussionist Katada Kisayo. The event featured a film from the Kobe Planet Film Archive's collection, *Ishidomaru, Tsukushi no tachikaze* (1925), which was digitized in the last academic year with the cooperation of the Yanai Initiative, and a *biwa* script from the National Film Archive of Japan (NFAJ)'s collection. In the first part of the symposium, collaborative researchers Kamiya Makiko, Shirai Fumito, and Shibata Kotaro presented research on the film's historical background, silent film practices in Germany, and the genealogy of *biwa* films. In the second part of the symposium, a multifaceted discussion was held, with commentary by museum director Kodama Ryuichi and talks with the performers.

To further disseminate the team's findings on film screening materials, Shibata gave an oral presentation at the 51st National Convention of the Japan Society of Image Arts and Sciences (June 1, 2025, Kobe University) about the film supply system in the Taisho period and movie theaters in Sapporo. Principal researcher Okada Hidenori played a leading role in creating a program for the preservation and utilization of film-related materials at the 2026 National Archive Summit on Film-Related Material (January 23, 2026 / online) organized by the NFAJ (AY2025 Model Project for the Development of Core Archival Hubs). Okada also provided daily commentary on the films featured in the "Japanese Silent Cinema" special screening held in France by the Jérôme Seydoux-Pathé Foundation from October 21-25, 2025. In October 2025, Kamiya published a book entitled *War, Occupation, and Japanese Cinema: Reframing the "Darkness" of History* (Seidosha), which includes some of the results of this research.

Research on the Systematic Organization of Materials Related to the Tiny Alice

Principal Researcher: Kim Yun Jeong (Full-time Lecturer, Sugiyama Jogakuen University)

Collaborative Researcher: Okada Fukiko (Full-time Lecturer, Kyoto University of the Arts)

Research Objectives

This study will organize and catalog extensive materials—documents, posters, pamphlets, flyers, photographs, video records, and reviews—related to Tiny Alice (a little theater in Shinjuku, Tokyo; 1983-2015) to lay the foundation for the preservation and utilization of these materials. In particular, we aim to investigate and organize materials related to the ALICE FESTIVAL, and based on the materials, clarify the historical development and cultural significance of the festival, as well as its position in the Japan-Korea theatrical exchange, which has been increasingly active since the 2000s. Through this process, we will examine the role of the Tiny Alice as a center for experimental practices in theater, music, dance, and film, and develop academic resources that will contribute to basic research on the Japanese little theater movement and the history of cross-border cultural exchange.

Summary of Research

This academic year, as the earliest stage in the project, we began the initial organization of materials related to the Tiny Alice donated to the Theatre Museum, especially those related to the ALICE FESTIVAL. Specifically, festival-related materials (such as flyers, programs, and printed materials with information on performances and projects) were identified among scattered materials, arranged in chronological order, and categorized based on information, such as the year and edition of the festival, to obtain an overall perspective of the groups of materials. This enabled us to understand the domains (theater, music, dance, film, etc.) that have been continually involved in the festival as well as the pattern of repetition and renewal of projects through the formation of groups of materials, and gain a perspective for future organization and study.

Furthermore, we held repeated meetings to understand the details of the materials, discussing basic information on the history of the festival, trends in participating groups, forms of performance, and frameworks for exchange, while researching specific names (such as participating groups, works, venues, and co-sponsors/collaborators) that appear in the materials. We also cross-checked continuity across related projects and series to improve description accuracy in future

cataloging.

Regarding items for which information was unclear in the materials and relationships between projects, we conducted interviews with collaborator Kim Seil (director/actor) to confirm the positioning of individual materials. Although many of the donated materials were similar in terms of the appearance of the printed copies, through interviews, we were able to refer to the actual management and production practices of the time and find clues to distinguish between multiple materials related to the same project, derivative projects, peripheral events, etc. These steps are essential for arranging materials and establishing organizational units (groups of materials) with background information.

Furthermore, for audiovisual materials, we prioritized items for digitization with collaborators and devised a plan for future digitization and preservation (to be carried out by the Theatre Museum). Because recorded media vary widely and face deterioration and playback restrictions, we established the order of priority based on rarity of contents, importance in the history of the festival, and possibility of matching with other materials. In addition, we made progress in organizing the flyer data chronologically, in preparation for future data registration.

Although the above findings have not led to the completion of the final catalog or the publication of analysis results, they are significant for two reasons: First, they led to the establishment of an organizational framework based on a chronological axis for materials related to the ALICE FESTIVAL, which are at the core of the Tiny Alice collection; additionally, they clarified the characteristics of groups of materials and the challenges involved in research. This study was supported by JSPS Grant-in-Aid for Scientific Research 23K00226. Materials and interviews confirmed the festival's management practices and evidence of Japan-Korea theatrical exchange, providing a basis for future cataloging and analysis.

In the future, we will continue cataloging and data registration; as digitization progresses, we will systematize cross-references and publish the collection for research and educational use.

Survey of Maeda Naoki Materials

Principal Researcher: Saito Keiko (Associate Professor, Department of Japanese History and Culture, School of Japanese Studies, Aichi Prefectural University)

Collaborative Researchers: Ito Masaru (Associate Professor, Meiji University); Moriya Risa (Program-Specific Associate Professor, Institute for Research in Humanities, Kyoto University); and Kondo Tsugumi (Assistant Professor, Waseda University Theatre Museum, Waseda University)

Research Objectives

In February 2024, Katori Takao, the heir of former Imperial Japanese Navy serviceman Maeda Naoki (1896-1964), donated a collection of Maeda's materials to the Theatre Museum. From 1932 to 1934, Maeda was appointed assistant to the military attaché at the Imperial Japanese Embassy in Moscow, Soviet Union. At the outbreak of the Pacific War, he became a military attaché stationed in Harbin, and after the end of the war in Manchuria, he was interned in the Soviet Union and demobilized in 1953. A major part of the donated materials consists of theatre-related materials that Maeda collected locally during his time in Moscow. This study aims to achieve the following two objectives based on a survey of materials. The first objective is to closely examine the rare records of Japanese individuals who actually experienced prewar Soviet performing arts to clarify how the Japanese of that time interpreted Soviet arts as a cross-cultural experience. The second objective is to understand the origin of the performing arts that internees experienced in Siberian prison camps, which had a significant impact on postwar Japanese culture. In internment camps, the practice of performing arts was encouraged as part of Soviet socialist propaganda. Maeda witnessed performances that lay the foundation for the Soviet performing arts practiced in the camps.

Summary of Research

Among the donated materials, the Theatre Museum received 255 stage photographs and bromides of Soviet theatre, ballet and opera, 36 Russian-language books, one theater-going notes from a period of residence in Moscow, one postcard written in Japanese, and a set of seven preliminary drawings for a *kabuki* program. Additionally, 70 other books were transferred to the Waseda University Library, 40 of which will be housed there after the necessary selection process. Most of the other materials in the Maeda Naoki Collection are housed at the Yamato Museum (Kure Maritime Museum) and the Kobe Planet Film Archive, while some remain in the possession of Maeda's relatives. A comprehensive

examination of these materials may open up prospects for research in many fields, including the history of Russian theatre, intelligence activities by the Imperial Japanese Navy, the use of art in wartime propaganda, and the experiences of internees in Siberia.

This project began in April 2025. In the first year, we began our activities by interviewing Maeda Naoki's relatives; we then transcribed his theater-going notes and cataloged the performances he attended; finally, we commissioned the writing of a paper to clarify Maeda's personal history.

Katori Takao and Maeda's relative, Kato Junko, participated in the interviews. Five students from the Aichi Prefectural University Undergraduate School of Japanese Studies assisted in the transcription of the theater-going notes. Graduate students from the Drama and Theatre Arts Program of the Meiji University Graduate School of Arts and Letters assisted in the cataloging of the performances (in both Japanese and Russian). Individuals who experienced performing arts in the Soviet Union and recorded their impressions before Maeda include Narumi Kanzo, Osanai Kaoru, and Sonoike Kinnaru. The distinctiveness of Maeda's records lies in his exceptionally observant eye for staging and the meticulousness of his sketches of stage sets, which one would not immediately expect from omit "the common image of" a military serviceman. The style of writing suggests that Maeda intended these records as memoranda to be expanded on later on.

As a result of the interviews, we learned about the findings of several researchers who have been cooperating with the relatives at their request. Some of their works are still unpublished. Among them, we asked Okita Kyosuke, a doctoral student at Nihon University's Graduate School of Literature and Social Sciences who conducted in-depth research on Maeda's activities during his years in the navy, to contribute to the bulletin of the Theatre Museum (to be published in *Studies in Dramatic Art* No. 49). His study reveals that it was Maeda's official assigned duties that made his extensive collection activities possible.

○ Selected research

The selected research consists of joint research projects derived from the reviewed proposals, which aim to promote the effective use of the Theatre Museum's collections. The Center provides a venue and materials for these joint research projects.

Selected research

1

Basic Research on the Okamoto Kido Collection

Principal Researcher: Yokoyama Yasuko (Professor, Department of Advanced Sciences, Faculty of Science and Engineering, Hosei University)

Collaborative Researchers: Higashi Masao (Literary Critic, Anthologist); Komatsu Shoko (Professor, Faculty of Letters, Arts, and Sciences, Waseda University); Suzuki Yusaku (Specially-Appointed Assistant Professor, Center for Modern Kagoshima Studies, Faculty of Law, Economics and Humanities, Kagoshima University); Hara Tatsukichi (Curator, Setagaya Literary Museum); Matsuda Shohei (Fixed-Term Assistant Professor, Faculty of Letters, Otani University); Wakisaka Kensuke (Gakushuin Boys' Senior High School); and Katsukura Ai (Nagoya City Higashigaoka Elementary School)

Research Objectives

The purpose of this study is to conduct basic research and analysis on materials in the Okamoto Kido Collection. The year 2022 marked the 150th birth anniversary of Okamoto Kido (1872-1939), who left a significant mark on the fields of theater and literature. Kido was an active writer in a variety of fields, including plays, drama reviews, novels, essays, and translations. In recent years, he has attracted attention not only in the research fields of modern drama and modern literature but also in diverse fields such as the study of ghosts, ghost stories, and *yokai*. However, since the writings of his adopted son, Okamoto Kyoichi, basic research on the Kido Collection has been scarce, research has not made progress. This study focuses on Okamoto's unpublished and untranscribed diaries and aims to digitize and transcribe them. We believe that these materials are first-rate resources for understanding the later life of the writer Okamoto Kido, and that transcribing them and making them widely available will provide a new perspective on Kido's activities and creations.

Summary of Research

The Theatre Museum houses Okamoto Kido's handwritten diaries from July 1923 to December 1938. Among these, the diaries from 1931 to 1938 had not yet been published or transcribed. The team continued the transcription of the diaries that began last year, and in July 2025, published the January-December 1931 and January-December 1932 diaries.

In these diaries, Kido has reached the age of 60. In addition to his vigorous writing activities, he describes his efforts in training his successors and editing the magazine *Butai* (Stage). Kido's diaries provide a matter-of-fact account of his daily life as a city dweller amid various major social events, such as the Mukden Incident and the development and expansion of Tokyo City, and serve as valuable materials to shed light on history based on personal records.

To commemorate the diaries' publication, we held the event "The Daily Life of Okamoto Kido: Symposium Commemorating the Publication of Okamoto Kido's Diaries from 1931 and 1932" (August 23, 2025, Waseda University Building 3, Room 401).

The symposium featured four research papers: "Okamoto Kido in 1931 and 1932: *Kido Zenshu* and *Dokugin*" by Hara Tatsukichi; "Okamoto Kido as a Leader: Futaba Kai and *Butai* Magazine" by Akai Kimi; "Okamoto Kido and the Reorganization of the Detective Story Genre" by Matsuda Shohei; and "How the Popular Gaze Relativizes History: Okamoto Kido's *Saigoboshi*" by Suzuki Yusaku. Additionally, Higashi Masao, Yokoyama Yasuko, and Komatsu Shoko held a tripartite discussion examining the appeal and new significance of Kido's works.

Nearly 100 people participated in the in-person and online sessions and a variety of opinions were exchanged during the Q&A. Novelist Kyogoku Natsuhiko also made interesting comments about Okamoto Kido and his detective novels, confirming that Kido and his works are capable of attracting a wide range of interest.

This academic year, the team also plans to release transcriptions of the January-December 1933 and January-December 1934 diaries. At that time, Kido had moved from his usual residence in Motozono-cho, Kojimachi Ward to a separate house in Kamimeguro, and many of the entries vividly portray life in the suburbs of Tokyo.

The transcribed diaries are already available on the website of the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts and will be updated in the future. It is our hope that, once this information is widely available to the public, it will be utilized by many people.

The transcription and publication of four years of Kido's diaries over the course of just two years can be considered a significant achievement. However, the remaining four years of diaries have yet to be transcribed. We believe that there is a need to transcribe these diaries, which provide a record of Kido's final years.

Literary Circles of the Mid-Edo Period, Through Diaries of *Kabuki* Actors

Principal Researcher: Björk, Tove (Professor, Graduate School of Humanities and Social Sciences, Saitama University)

Collaborative Researchers: Inaba Yusuke (Associate Professor, Faculty of Representational Studies, Wako University); and Hioki Takayuki (Professor, School of Information and Communication, Meiji University)

Research Objectives

Based on the diary of *kabuki* actor Ichikawa Danjuro II, this study aims to (1) examine the composition process of the diary and its authenticity as an historical material; and (2) investigate the literary circles of the mid-Edo period, focusing on *kabuki* performers. The *Hakuen Diary*, along with another diary entitled *Kakibyoshi* (Persimmon Cover), was copied by the attending physician of the *kyōka* parody poet Shikatsubeno Magao and his son. It constitutes an important record of the daily lives of *kabuki* actors in the mid-Edo period and the literary circles that surrounded them. With the diary as a starting point, this study aims to elucidate the environment surrounding *kabuki* actors during the Kyōho era and their connections to *haikai* poets and other literati.

Summary of Research

This academic year, first, we continued the annotation and commentary of the diaries. Second, we examined amateur' imitations of *kabuki* performances in the Three Great Festivals of Edo recorded in Danjuro II's and Nakamura Nakazo I's diaries, as well as an *ukiyo-e* series depicting parades during the Gion Festival in Kyoto. Third, we analyzed *Enyu Nikki* (Diary of Banquets and Amusements) by Yanagisawa Nobutoki, the second lord of the Yamato Koriyama domain and a regular *kabuki* performer, to examine the realities of *kabuki* performances in feudal residences. Fourth, we investigated 42 publications presenting the origins of *Kabuki* theatres and *Kabuki* acting published from the late 18th to late 19th century, considering how the world of *Kabuki* chose to stress its respectability in the government approved business licences and long family lineages.

We continued to annotate the diaries of Ichikawa Danjuro II, publishing Part 10 and Part 11 in (Saitama University Faculty of Liberal Arts Review) Vol. 61, No. 1, & 2. These sections of the diary cover the 25th of the 6th month to the 7th days of the 7th month of Kyōho 19 (1734). During this period, Danjuro II made pilgrimages to temples and shrines around his villa in Meguro but also attended an emergency meeting of leaders in the

kabuki world following the death of Bando Matakuro II. These entries discuss the closing of the Morita-za theater, an extremely important turning point in the history of *kabuki*, and the specific circumstances that led to the development of *hikae yagura* (substitute theaters) in the *kabuki* world.

The second result was presented at an International Federation for Theatre Research at the University of Cologne, Germany (June 10, 2025), as "The Walk of Fame – Women of the Licensed Quarters Dressing like *Kabuki* Actors in Early Modern Festival Parades." Similar findings were presented by collaborative researcher Hioki at the Institute for Performing Arts, hosted by Meiji University, under the title "Methods of *Kabuki* Reconstruction in the Early Modern Period." The main findings were that the *kabuki* characters reconstructed at the festivals chose symbolic elements to express the characters rather than downright imitation.

The third research result has been summarized in a paper entitled "Kabuki Performances and *Okyogenshi* Performers at the Yanagisawa Nobutoki Residence as Seen in *Enyu Nikki*," which will be published in the journal *History of the Performing Arts*. This paper reveals that when Yanagisawa Nobutoki prepared for *kabuki* performances at his residence, he first chose dance scenes that were popular in theaters at the time, and then composed a script by combining several *yoruri* books. It was also noted that the residence *okoyogenshi* have been a relative of Nakamura Nakazo I.

Fourth, principal researcher Björk collected and analyzed commercial publications describing the origin of *kabuki* theatres and the lineages of important actors's houses, establishing early modern sense of 'tradition' as a business practice, the results published in "Traditional' *Kabuki* – from Business Practice to National Policy" *Critical Stages/Scènes critiques*, Dec 2025, Issue 23.

Above are the main results of this research in AY2025. In the future, to shed more light on the realities of literary and artistic circles in the Edo period, we plan to further analyze the specific relationships between theatre makers, fans, writers, and *haikai* poets in Edo.

Empirical Research on Regional Theater Under the GHQ (SCAP) Occupation: Focusing on the Kyushu Area

Principal Researcher: Ogawa Chikashi (Professor, Faculty of Childhood Education, Yokohama Soei University)

Collaborative Researchers: Sugawa Wataru (Associate Professor, College of Letters, Ritsumeikan University); and Hatanaka Sayuri (Part-time Lecturer, Osaka University)

Research Objectives

The objective of this study is to clarify the characteristics of the theater produced immediately after World War II in the Kyushu area. This is accomplished through an analysis of the Dizer Collection (scripts from Kyushu-area theatrical productions censored by the SCAP [GHQ]).

Summary of Research

This academic year, 13 scripts from the Dizer Collection were digitized. The results of this research were presented at the 186th meeting of the Institute of 20th Century Media held in May 2025. In addition, an article will be published in the Institute's journal, *Intelligence*.

The research results of each of the collaborative researchers are outlined below.

Regarding amateur theater, we conducted a survey of scripts submitted by the Reimeiza theater in Hiroshima Prefecture. The collection includes many scripts submitted by the Reimeiza theater, led by evacuee theater artist Takenaka Sokichi. An examination of these scripts revealed aspects of the theatrical culture introduced to the region by theater artists who had been active before the war. We also clarified the actual status of submissions for censorship related to theatrical activities in the region.

Regarding theater companies in Kumamoto, we examined the expressive differences between *shojo kageki* and *shingeki* in postwar Kumamoto based on research on conducted in the academic year before last on Gekidan Orionza, and research on the works of the Bungeiza Theater Company and Shimokawa Enji conducted in the last academic year. Specifically, drawing insights from the history of works that were not allowed to be performed, we discovered that Bungeiza's and Shimokawa's plays thematized the contradictions and conflicts of postwar society, such as demobilized soldiers, agrarian reform, and the crisis of values, and viewed postwar reform from a critical perspective. Meanwhile, we confirmed that Orionza

was staging plays that were entertaining and topical in nature, actively addressing various elements from that time, such as the new Constitution, the rationing system, and postwar democracy. Through this comparison, we demonstrated that even in the same time and place, differences in genre had a significant impact on the reception and representation of postwar society. In addition, Bungeiza's repertoire included plays based on existing literary works, such as Tokutomi Roka's *Kaijin* (Ashes) and Miyazawa Kenji's works. In the future, we hope to explore how Shimokawa adapted and reconstructed these works, transforming them into unique plays.

Regarding popular theater genres, we examined their content focusing on the Higuchi Jiro Theater Company, the Nanjo Takashi Theater Company, the Mikawaya Momotaro Theater Company, the Emi Saburo Theater Company, and the Okawa Ryunosuke Theater Company, which were based in Kyushu and were popular from the prewar to the occupation period. It is clear from our research to date that popular theater at the time was rich in variety. Many plays included standardized themes, such as a the wandering life of a gambler or revenge. However, there were also plays about demobilized soldiers, which were based on current events, romance plays about sailors, and plays that featured the occupation forces (although many were not allowed to be performed due to censorship). This indicates that the popular theater of the time did not stick to old-fashioned themes but continued to seek out stories that would entertain the audience. We also reviewed the actual scripts of *setsugeki* (plays accompanied by *rokyoku* narrative singing), which are rarely performed today, and a small number of *rensageki* (plays alternating live performances with film screenings). Such scripts will be a valuable resource in the study of past forms of performance. The collection includes numerous scripts in the popular theater genre. Up to this academic year, we have been able to examine only about one-fifth of these scripts. We plan to steadily continue our survey of the materials in the future.

Research on *Kodan* Materials in the Tanabe Koji Collection

Principal Researcher: Imaoka Kentaro (Professor, College of Art and Design, Musashino Art University)
 Collaborative Researchers: Sato Katsura (Professor, College of Literature, Aoyama Gakuin University);
 Sato Yukiko (Professor, University of Tokyo Graduate School); Takamatsu Hisao (Professor, Faculty of
 Letters, Arts and Sciences, Waseda University); and Takiguchi Masahito (Lecturer, Keisen University)

Research Objectives

The late Tanabe Koji was a longtime editor at Shinchosha. While working in that role, he conducted research on *kodan* storytelling and edited and published the magazine *Kodan Kenkyu* (Kodan Research) to introduce materials and publish his research findings. The purpose of this study is to elucidate the full extent of the materials related to *kodan* in the Tanabe Collection which was donated to the Waseda University Theatre Museum. Among the wide range of *kodan*-related materials collected by Tanabe, the most unique are the audio recordings of *kodan* broadcast on the radio from the 1960s to 2000s, of interviews with *kodan* performers themselves, and of *kodan* meetings hosted by Tanabe. This study will begin with a full investigation and digitization of the audio materials, followed by cataloging of the recorded performances.

Through our work on this project, we will shed light on the characteristics of *kodan* performances handed down in the Showa and Heisei periods and the characteristics of *kodan* performers themselves (such as the repertoire handed down to them and their artistic styles). Simultaneously, we will proceed with the identification of the performances in the digitized audio materials. While conducting this work, we will also examine the influence of literature in the early modern and modern periods, the influence of *rakugo* and other forms of vaudeville theater, and the mutual influence between these art forms and *kabuki* performances.

Summary of Research

In AY2025, continuing on from the last academic year, we focused on the digitization of audio materials and cataloging of performances from the Tanabe Collection. With the help of research collaborators, we digitized the performances, identified them, cataloged them by performer, and analyzed the oral performance trends of *kodan* during the Showa and Heisei periods. At this stage, about three quarters of the 887 items in the provisional catalog have been identified and digitized. This has made future surveys and research on

these audio sources possible without worrying about degradation of sound quality. However, about one quarter of audio sources have not been identified and digitized. These tasks will be addressed from the next academic year. Meanwhile, we are still looking for ways to publish the digitized materials in a limited capacity for research purposes, although we are not yet at a point where the materials can be made fully available to the public due to copyright issues. This will also be a task for the next academic year and beyond.

Through this work, we also discovered an audio source for *Hanano*, a novel by Setouchi Jakuchō (Harumi) about Kanda Shōri II. This finding reaffirmed the importance of *kodan* in the study of literature in aspects other than performance.

Meanwhile, the identification and matching of the performances themselves, which is conducted in parallel with the above, is difficult. This is partly because many of the materials are parts of full-length performances, and partly because it is difficult to create subheadings and correctly position them within full-length performances. As our work progressed, it became necessary to compare the Tanabe materials with those of Osaka Metropolitan University, which holds a collection of shorthand materials formerly belonging to Yoshizawa Hideaki and is preparing to organize and publish these materials. In March 2025, principal researcher Imaoka and collaborator Kanno visited Osaka Metropolitan University to compare the audio recordings in the Tanabe Collection with these shorthand materials.

We believe that the findings of this research, based on actual oral performances, will provide new perspectives for the study of early modern and modern literature.

Additionally, to disseminate some of the results of these studies, a public research meeting entitled “Literary Studies and *Kodan*” was held on January 27, 2026, and a symposium entitled “The Expansion of *Kodan* as Seen from Materials in the Tanabe Koji Collection,” which included a demonstration of *kodan*, was held on February 7, 2026.

Overview Survey of Print Inventory Left Behind by Sakagawaya, the Original Publisher of Tokiwazu-bushi

Principal Researcher: Takeuchi Yuichi (Professor, Research Institute for Japanese Traditional Music, Kyoto City University of Arts)

Collaborative Researchers: Suzuki Eiichi (Adjunct Researcher, Theatre Museum, Waseda University); Tsuneoka Ryo (Director, Tokiwazu Association); Abe Satomi (Part-time Lecturer, Musashino Academia Musicae); Maeshima Miho (Associate Professor, Kunitachi College of Music); Shigefuji Gyo (Visiting Researcher, Institute of Information Education, Edogawa University); and Konishi Shiho (Collaborative Researcher, Kyoto City University of Arts)

Research Objectives

In 1860, near the end of the Edo period, Sakagawaya inherited Tokiwazu woodblock prints from their original printer, Igaya. Sakagawaya continued to reprint these works as well as publish new works through the Showa period, printing original copies (practice books) from woodcuts up through 1987 or so. The “print stock” (stock of printed originals and unfinished copies, 47 boxes in all, numbering several tens of thousands of items) formerly owned by this publisher and donated to the Theatre Museum constitutes the “materials related to the original Tokiwazu-bushi in the Sakagawaya Collection” that are the subject of this study.

To reliably organize, preserve, digitize, and publish this unique group of materials, our primary objective for this academic year was to conduct a bibliographic survey and create a basic catalog of the entire group of materials. In the future, a more in-depth investigation will shed light on the actual activities of Sakagawaya, which was arguably the last printer of its kind in Japan.

Summary of Research

(1) Survey of current condition of material storage boxes

We confirmed that the box numbers (primary numbers) assigned after the collection was acquired by the Theatre Museum go from 1 to 35. However, there are two missing numbers. In addition, 14 boxes have been given sub-numbers. The sub-numbers were apparently assigned when materials in old boxes that had been damaged were divided into several new, smaller boxes. The total number of boxes is 47.

(2) Bibliographical survey, assignment of package numbers (secondary numbers) and cataloging of each package in the boxes

Next, we surveyed the status of the materials stored in all the boxes. Although there are signs of damaged strings being replaced, and some materials being

reclassified during a preliminary survey in 1995, the packaging from the time of Sakagawaya’s closing is generally preserved as is.

The majority of the materials are print stocks of Tokiwazu practice books. A summary of the survey and some photos were published in the last academic year’s Newsletter. In addition, we confirmed the existence of a print stock of pocket-sized practice books, a print stock of *daisen* (title slips), a collection of program prints, and material fragments and memoranda related to editing, printing, sales, and more. Notably, the *usumono shohon* (thin scripts) of the late Edo period and the *kabuki banzuke* (*kabuki* theater programs) of the Meiji period, which had been confirmed in the 1995 preliminary survey, were not included in the survey materials.

To enhance the preservation of the materials and facilitate cataloging and future digitization, all materials were assigned a secondary number and cataloged by original package or arbitrary grouping. The secondary numbers are approximately 120 in total.

(3) Photography and digitization of program prints and other materials

The collection includes about 150 types of program prints and other Tokiwazu-related materials, most of which are single-sheet prints. Unfinished copies and notes are included as well. The materials are believed to include a mix of print stock printed by Sakagawaya on consignment and prints delivered to Sakagawaya by related parties. There are also many rare materials that were not available in the biographical survey of performers conducted by the principal researcher (*List of Tokiwazu-bushi Performers* in eight volumes, published by the Tokiwazu-bushi Preservation Society, a project subsidized by the Agency for Cultural Affairs). We intend to conduct an overview survey and create a catalog of the programs in the next one or two academic years.

Research on the Concept of “History of Japanese Performing Arts” in the Ozawa Shoichi Collection: “Art,” “Sexuality,” and “Discrimination” in the Historiography of Performing Arts

Principal Researcher: Suzuki Seiko (Associate Professor, Graduate School of Humanities, Osaka University)
 Collaborative Researchers: Ukai Masaki (Professor, Kyoto Bunkyo University); Kakinuma Ayako (Specialized Researcher, Ritsumeikan University); Kyotani Yoshinori (Professor, Gakushuin University); Seto Tomoko (Associate Professor, Kobe College); and Muto Daisuke (Professor, Gunma Prefectural Women’s University)

Research Objectives

The Ozawa Shoichi Collection includes radio, television, film, and theater scripts performed by Ozawa Shoichi (1929-2012), a *shingeki* actor, as well as scrapbooks, performance pamphlets, photographs, audiovisual media, and other materials. This study analyzes interviews conducted by Ozawa in the late 1960s, recorded on open-reel tapes and cassette tapes, to elucidate the “history of Japanese performing arts” that Ozawa attempted to portray by seriously approaching the themes of “art,” “sexuality,” and “discrimination.”

Summary of Research

Since the last academic year, our research team has been studying and analyzing the digitization (conducted by the Theatre Museum) of open-reel tapes found in the archives of the Ozawa Shoichi Collection. These tapes contain interviews recorded by Ozawa Shoichi in the late 1960s, in which he spoke with people who were “despised and looked down on by the world” in search of sources for his history of performing arts.

This academic year, we worked primarily on the digitization of cassette tapes (conducted by the Theatre Museum and this team). With three new collaborative researchers (Ukai, Kyotani, and Seto) joining the team, we deepened our study of the issues and expanded our perspective on Ozawa’s interviews based on each researcher’s area of interest. After a discussion at a Zoom meeting in August, we gradually understood that Taishū *engeki* theaters and strip theaters of the past were “spaces’ where diverse people were drawn together and gathered” (Ukai). We endeavored to provide the Theatre Museum with reports analyzing the contents of the audio recordings from an academic perspective, to be used as a reference when considering the open/closed status of its audio materials in the future.

From the beginning, the team has been exploring a new question, namely, how museums and archives can handle audio recordings of interviews related to “art,” “sexuality,” and “discrimination,” including contents that could be considered “antisocial” or “potentially

disruptive to public order and morals” even today, or that require consideration in terms of human rights. In one of the interviews digitized this academic year, Ozawa’s interviewee made a somewhat snide remark about a prominent colleague (this part was cut from Ozawa’s writings). Although this was very interesting, we concluded that publishing that remark would require further consideration due to the potential invasion of privacy (Muto).

As in the last academic year, because of the wide range of occupations of the interviewees, we attempted to conduct a collaborative survey in which experts listened to and discussed the audio recordings (Seto, Suzuki, and research collaborator Kushiya Natsuho). As a case in point, we asked Ikari Sadako, Japan’s first female professional wrestler, to listen to an interview conducted by Ozawa with Obata Chiyo, a fellow female professional wrestler who was close to Ms. Ikari. As a result, Ms. Ikari was able not only to advise the team but also to speak spontaneously about herself without needing to be asked questions. This outcome fully demonstrates the appeal of audio materials (Seto).

Continuing on from the last academic year, to understand and archive the historical context of audio recordings, we proceeded with a detailed inventory of scrapbook materials (photo at the bottom right of this page) ordered by Ozawa and produced by a contractor (the inventory was conducted by research collaborator Kabata Ayumi). The team exchanged ideas using a LINE group as well as research meetings, conferences, and e-mails, and ultimately demonstrated that these scrapbook materials can function organically as a database.

To present the above results to the public, in February 2026, we conducted a research meeting at Dogo Onsen (Ehime) to review the audio materials assigned to each team member and examine some of the recordings and notes. In addition, the Association for the Study of Cultural Resources (Secretariat, the University of Tokyo) has asked several team members to present their findings at a research meeting in October 2026 (Kyotani).

Encouragement Research Project

In AY2020, the Center launched the Encouragement Research program to promote basic research for future joint research projects at the Center. This research is primarily conducted by the young researchers at the Theatre Museum. In AY2024, four research projects were selected and a wide variety of research activities were conducted.

The following four research projects were selected for AY2025: (1) “Research on Materials Related to Osanai Kaoru” (Kumagai Tomoko); (2) “Research on the Genealogy of Okinawa-mono Theater: Referring to Social Background and Narrative Works of Other Genres” (Kondo Tsugumi); (3) “Cataloging Rare Materials on Chinese Performing Arts in the Theatre Museum Collection (Continued)” (Li Jiaqiao); (4) “Korean Cinema and Shinpa Sensibility in the Colonial Period: A Comparison with Japanese Cinema” (Ku Mina). In

each research project, researchers from within and outside the university collaborated to investigate and examine the vast and diverse materials of the Theatre Museum.

Some of the results were presented at the Theatre Museum’s spring exhibition, “Can Theater Convey the Experience of War?—80 Years of Japanese Postwar Theater,” and fall exhibition, “Sino-Japanese Theatrical Exchange: Ouyang Yuqian, Tian Han, and Japan.”

Project Organized by the Center

Since it began receiving support for functional enhancement from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) (AY2016–2018), the Center has been actively engaged in joint research projects conducted in collaboration with domestic and foreign research institutions and private companies under the leadership of the Center.

“Silent Film Screening with Benshi Narration” featuring a dramatic dialog by benshi performers and the Japanese-Western ensemble music by Colored Monotone

On September 12, 2025, a “Silent Film Screening with Benshi Narration” was held in collaboration with the Onoe Matsunosuke Heritage Preservation Society, as a special screening to commemorate the 150th anniversary of the birth of Onoe Matsunosuke and the 100th anniversary of the birth of Matsuda Shunsui. The event featured dramatic dialog by *benshi* performers and music by Colored Monotone, an ensemble that uses a mix of Western and Japanese instruments.

In the first part of the event, Yamazaki Vanilla played the Taisho harp while narrating *Goketsujiraiya* (Matsuda Film Productions Collection), and the four *benshi* Kataoka Ichiro, Sakamoto Raiko, Yamashiro Hideyuki, and Yamauchi Nanako, as well as the Japanese-Western ensemble Colored Monotone, performed the accompaniment to

Kaminarimontaika chizomenomatoi (Theatre Museum Collection). Theatre Museum Director Kodama Ryuichi introduced and explained the documentary films *Gotairangeki* (Kobe Planet Film Archive Collection) and *Matsunosuke sogi jikkyo* (National Film Archive Japan [NFAJ] Collection).

In the second part of the event, NFAJ Deputy Director Irie Yoshiro gave a lecture entitled “Matsunosuke Plays and Dramatic Dialogue,” followed by the main highlight of the event, a screening of *Shibukawabangoro kirishimayamakumotaijinoba* (Matsuda Film Productions Collection) accompanied by dramatic dialog featuring all twelve *benshi* and musicians. This extraordinary performance was overwhelmingly powerful, leaving the audience electrified.

Joint Project with National Film Archive Japan (NFAJ)

In the last academic year, the Center's attempt to "reconstruct" the various screening styles of the past using silent films from the Theatre Museum's collection, which has been ongoing since AY2018, was developed as a joint project with the NFAJ.

Symposium

Cinema and *Gidayu*: Reconstructing Screenings with Onstage *Gidayu* Accompaniment

In Japan, during the silent film era, film screenings were narrated by *benshi* and enhanced by diverse cultural voices. Since 2018, the Center has been attempting to "reconstruct" various screening styles of the past using silent films from the Theatre Museum's collection. This academic year, the initiative was developed into a joint project with the NFAJ to shed light on screenings involving *gidayu* performances.

This event was a follow-up to the workshop "Cinema and *Gidayu*: Voice and Sound in Old Theatrical Films" (held on May 7, 2024), which investigated the challenges and possibilities of attempting to screen films with onstage *gidayu* accompaniment today based on audio recordings of postwar *gidayu* screenings featuring Okura Mitsugu, who was active as a *benshi* in the silent film era. This event was an attempt to screen old theatrical films accompanied by female *gidayu* performers, with the cooperation of Tsurusawa Tsugaju (*joryugidayushamisenkata*) and Takemoto Kyonosuke (*joryugidayutayu*).

In the first part of the event, Tomita Mika (Chief

Researcher, National Film Archive Japan) and Shibata Kotaro (Invited Researcher, Waseda University Theatre Museum) explained the purpose of the event, namely, the reconstruction of a film screening with onstage *gidayu* accompaniment. Tomita spoke on "Tokyo's Taishokan Movie Theater and Its Surroundings during the Meiji and Early Taisho Periods," and Shibata spoke on "*Gidayu-mono* Film Screenings in Sapporo During the Taisho Period," focusing mainly on the historical background of these screenings. After an explanation provided by Theatre Museum Director Kodama Ryuichi, two films were screened: *Kyugeki Taikoki Judanme: Amagasaki no Dan* (1908) from the collection of the NFAJ and *Asagao Nikki* (1909) from the Theatre Museum's collection. The screenings were accompanied by performances of Tsurusawa Tsugaju and Takemoto Kyonosuke.

In the second part of the event, Theatre Museum Director Kodama Ryuichi facilitated a tripartite talk session featuring himself, Ms. Tsurusawa, and Ms. Takemoto.

The talk was lively and full of laughter, as the speakers recounted not only the historical background of screenings with onstage *gidayu* accompaniment but also behind-the-scenes stories regarding the planning of the project.

International Collaborative Projects

Since the outbreak of the COVID-19 pandemic, the Center has been using online tools for active research exchange with foreign institutions to produce ample research outcomes this academic year as well.

Japan-UK dialog

Kabuki and Shakespeare in Performance: Past, Present, and Future - Part III

The Theatre Museum (founded by Tsubouchi Shoyo, the first person to translate the complete works of Shakespeare into Japanese) has built a collaborative research relationship with the University of Birmingham in the UK and its Shakespeare Institute, a global hub for Shakespeare studies. Continuing on from the last academic year, the Center hosted Professor Tiffany Stern of the Shakespeare Institute for a Japan-UK dialog on "*Kabuki* and Shakespeare in Performance: Past, Present, and Future—Part III" (December 1, 2025, online, closed). Professor Stern's interlocutor was Professor Kodama Ryuichi of the Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University, a *kabuki* scholar who is also the Director of the Theatre Museum.

The project aims to explore how we can approach and reproduce the performances that "do not remain" in

kabuki and Shakespeare studies; furthermore, it exchanges information that will contribute to mutual research, with the aim of laying the foundations for future comparative research on UK-Japanese theater. We exchanged information on what materials remain, what performances and materials can be restored or reproduced from them, and how we can reproduce and compare what may have existed in the past (the performances), rather than the plays themselves, in both the fields. This third part of the dialog focused not on actors but on puppets, clowns, musicians, and other performers. We discussed (1) what kind of materials and documents we can use to learn (know) about puppets, clowns, and musicians; and (2) in terms of the musical performances themselves, how we can infer and imagine historical practices (past performances) from later works and existing materials. A record of the dialog will be made available on the website of the Center..

Project Supporting the Decipherment of *Kuzushiji*

Since AY2016, the Center has been holding an “*kuzushiji reading support projects*” in conjunction with TOPPAN Inc.

The Theatre Museum has a valuable collection of Edo-era *yoruri maruhon*, which are very difficult to decipher because of their writing style. They are unique even among cursive *kuzushiji* writing. However, because the materials themselves are extremely important and useful for research on traditional arts, this project has worked to create a “*Kuzushiji OCR*” to enable even young international researchers and scholars make wider use of these materials.

This academic year, we created a new database of character notations for the *yoruri maruhon* “*Sugawara Denju Tenarai Kagami*” created in previous academic years, with a view to realizing an expanded comprehensive database of classical texts using *Kuzushiji OCR*. Furthermore, we carefully examined the content of the previously released character style dataset and updated it to enhance accuracy. These results will be made available on the Waseda University website and in the Waseda University Cultural Resource Database.

Project to Utilize Theater- and Film-related Materials

The Center is making active progress with digitization of materials and database creation to preserve the valuable and diverse collection of the Theatre Museum and make it widely available to the public.

The Center is actively working to digitize the materials in the Theatre Museum Collection and expand the possibilities of how these materials can be used. This academic year, we digitized materials from the Theatre Museum Collection, focusing on the Komada Koyo Collection and on audio materials formerly owned by Ozawa Shoichi and Tanabe Koji. These digitized materials were made available to the

collaborative research teams studying the materials, greatly contributing to their research activities. Additionally, the project to utilize film-related materials such as silent films digitized in the past continued this academic year. During the academic year, this was developed into a joint project with the National Film Archive Japan (NFAJ) (refer to page 32 for details).

AY2020–AY2025 External Evaluation

Three external evaluation committee members conducted an external evaluation on the Waseda University Theatre Museum Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts over a three-year period beginning in 2020 (Reiwa 2), upon the receipt of its third accreditation. The following presents the full text of the evaluation.

Saito Ayako (Professor, Department of Art Studies, Faculty of Letters, Meiji Gakuin University)

The previous external evaluation confirmed that, despite the unprecedented circumstances of the pandemic, the Center achieved substantial results as a research institute for theater and film arts through various innovations, including the development of “Urgent Theme Research.” In the three years from 2023 to 2025—the latter half of the Center’s third period of activities or what could be called the “post-COVID era”—the Center’s original projects gradually resumed. First, Organized Projects developed around three themes: examination of the state of performing arts in the post-COVID era, close collaboration with domestic and international private companies and research institutions, and exploration of the potential of digital resources and technology. While symposia and workshops were held for

the first two themes, the work of digitizing materials, which is extremely important for enhancing public availability, also made significant progress. This is simple but time-consuming work, and there are questions as to how long the theme of performing arts in the post-COVID era will continue as an Organized Project. However, it seems extremely important that the other two projects continue in the long term.

Additionally, the number of “Principal Research” projects decreased during the COVID-19 pandemic, but increased to five in AY2025, indicating that the Center’s activities have returned to pre-COVID level. As of March 2025, the Center is conducting five “Principal Research” projects on materials related to Kubo Sakae, materials in the Kurabayashi Seiichiro Collection, film-related materials, materials

related to the Tiny Alice Little Theater, and materials in the Maeda Naoki Collection. The Center is also conducting six “Selected Research” projects on materials in the Okamoto Kido Collection, the Hakuen Diary of Ichikawa Danjuro II, scripts from Kyushu-area theatrical productions censored by the SCAP (GHQ) during the occupation (Dizer Collection), materials in the Tanabe Koji Collection, materials related to Sakagawaya, the original publisher of Tokiwazu-bushi, and materials in the Ozawa Shoichi Collection. Finally, the Center is conducting four “Encouragement Research” projects on the theatrical activities of Osanai Kaoru, the genealogy of *Okinawa-mono* theater, rare Chinese performing arts materials, and a comparison of Korean cinema and *shinpa* sensibilities in the colonial period. Collectively, these projects span history from modern to contemporary times, including the occupation period and cover a wide range of fields, such as *kabuki*, *shingeki*, vaudeville and performing arts, and cinema, demonstrating the Center’s accomplishments as a research institute for theater and film arts. The geographic range of the projects, which includes areas such as Kyushu, Okinawa, China, and Korea, is also evident, and the division of the projects into Selected Research and Encouragement Research is functioning well.

In addition, the researchers are more diverse than in previous years, and there is a strong impression that various universities and institutions, and senior and junior researchers, are working together to conduct research. This may not be an easy task considering the uniqueness of the materials and the specialized nature of the research.

Nagata Yasushi (Professor, Graduate School of Letters, Osaka University)

The Center’s third period of activities (2020-2025) began amid the global COVID-19 pandemic crisis. This period was unique in that its circumstances were not merely an obstacle but an opportunity to restructure the Center’s research agenda and methodology. The rapid transition to online exhibitions, digital screenings, and international symposia was not only an emergency measure to ensure the continuity of operations but also an opportunity to incorporate the absence of performances and the social conditions of the performing arts themselves into the subject of research through international symposia and online screenings. This approach reflects an attitude that redefines theater not merely as a performing art but as a social and historical archive. This can be regarded as a situation that highlighted the Center’s characteristics as a museum-based research institute.

In terms of research, the system design combining Principal Research, Selected Research, and Encouragement Research has been stable and functional. The Center is pursuing the systematic organization of donated materials and the photographing and analysis of unpublished works.

This approach arguably reflects the sound implementation of the management structure and is commendable for its suitability to the Center’s projects.

Although this is not related to the content of the research itself and may be a minor point, there are several research proposals that seek to continue existing research projects. Some of them show virtually no change in research plans and methods, and several proposals have almost the same description from one academic year to the next. Preferably, the content should at least reflect the previous year’s research results and other details. Since the research reports present results for each academic year, this may not actually be a problem. However, it would still be desirable for the proposals to include a clear description of the previous year’s results as well.

Overall, although there is some variation among researchers, the Center has been successfully disseminating its research results, including conference presentations and paper submissions, and is properly fulfilling its function as a research institute. Although Encouragement Research may take longer than planned to produce results, the Center should continue to provide steady support to young researchers in the future. Personally, I was particularly impressed by the events held in collaboration with the UCLA-Waseda Yanai Initiative, which is close to my specialty, and the Samuel Beckett Film Festival held in collaboration with Kyoto University of Arts. I look forward to even more substantial activities in the future.

Furthermore, it is developing these initiatives into special exhibitions and projects related to Selected Research, thereby positioning research on Japanese materials in an international context. In addition, the Center is developing an expanded research infrastructure through connections with Grant-in-Aid for Scientific Research projects. These outcomes go beyond the results of a single academic year, involving multiple years of material organization and in-depth research. This makes them important from the perspective of forming a sustainable foundation for theatrical material research.

The diversity of subject areas is remarkable as well. Seemingly different thematic groups, such as research on early modern theatrical materials, history of film screenings, theater during the occupation, and postwar *shingeki* materials, share a common methodological orientation: “visualization of unorganized materials,” “careful examination of manuscripts and performance materials,” and “reconstruction of performance history.” From the reports on outcomes and the results of conference presentations, it can be confirmed that the Center’s research

has actually resulted in papers, reports, exhibitions, and international presentations. This demonstrates that the Center is continuing to pursue substantial activities, rather than merely a formal structure.

International research exchanges have also continued through specific collaborations with several regions, including China (Central Academy of Drama, Tianhan Foundation), the United States (UCLA Film & Television Archives), the United Kingdom (National Theatre Project, University of Birmingham), and France (Centre National de Danse). These are not simply courtesy exchanges but have resulted in the formation of substantial networks covering exhibitions, performances, symposia, and scientific cooperation. The fact that these exchanges were maintained during the COVID-19 pandemic and continued after the resumption of in-person meetings is a testament to the flexibility and sustainability of the Center.

In terms of contribution to partner institutions, the Center plays a crucial role in providing materials, designing research, and publishing results. The organization, photographing, and publication of donated materials represent the development of a research infrastructure that can be used by collaborating researchers and external institutions alike, and are highly valuable in terms of social sharing of intellectual resources. The systematic inclusion of young researchers and graduate students and the provision of opportunities to connect to research networks through Encouragement Research are also important as tangible contributions to the development of the next generation of scholars. In terms of management, budget execution is generally steady, and funds for photography and research assistance are secured as planned.

However, there are also tasks for future development. First, although a system based on the three frameworks of Principal Research, Selected Research, and Encouragement Research has been established, a look at actual activities shows that these systems tend to operate similarly in terms of surveying the materials, holding research meetings, and reporting results. The strengths of the system design may be further utilized by clearly defining the essential purpose of each framework (Principal Research = core long-term issues of the Center, Selected Research = novelty and strengthening external collaboration, Encouragement Research = fostering young researchers and promoting

experimental tasks, and so on), and by differentiating the format of publication of results and evaluation indicators. Second, it would be desirable to enhance the visualization of the qualitative ripple effects of Organized Projects. In the Center's third period of activities, a wide variety of Organized Projects such as special exhibitions, international symposia, and online screenings were held, achieving excellent results in terms of the number of participants and viewers. However, at present, there seems to be room for development of a mechanism to systematically track and present the results of these projects (peer-reviewed papers, co-authored papers, applications for grants-in-aid, launch of joint research, increase in the number of database users, etc.). For example, by establishing a framework for medium- to long-term follow-up on the publication status of exhibition-related articles, the establishment of joint research by symposium speakers, and the number of academic uses of screening materials, it may be possible to demonstrate the causal link between social contribution projects and the achievement of academic outcomes. This is a matter of not only strengthening public relations but also laying the groundwork to demonstrate the research productivity of the Center both quantitatively and qualitatively. Third, another task for the future may be to present the results of individual research as cross-sectional achievements of the Center as a whole. In the Center's third period of activities, a wide and diverse range of material-based research was conducted on prewar and postwar *shingeki*, opening up the possibility to harmonize and standardize the organizational methods, photography standards, cataloging methods, digital preservation formats, and other techniques used in each project. For example, the following strategies may be considered: formulation of common metadata design guidelines, articulation of long-term preservation strategies for the digitization of materials, publication of a cross-sectional collection of results, or development of a portal-like open infrastructure to integrate the results of 5 years of research. This would make it possible to present a collection of individual studies theoretically and systematically as a "theatrical material research model," rather than merely as parallel outcomes. In the next period of activities, the elucidation of this cross-sectional organization and publication strategy will be key to further strengthening the Center's international presence.

Zvika Serper (Professor Emeritus, Department of Theatre Arts, Faculty of the Arts, and Department of East Asian Studies, Faculty of the Humanities, Tel Aviv University)

Even during the challenging period from 2020 to 2025, the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts managed by the Waseda University Tsubouchi Memorial Theatre Museum has achieved remarkable results in a variety of activities.

1. Organization and Utilization of New Collections

The Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts has mainly created two highly effective research platforms, the main of which includes major and special studies led by skilled researchers from the Theatre Museum

and many other institutions in Japan. This platform has devised highly original research themes that select specific elements from a broader theater and film data corpus and examine them in depth. Materials based on the artists' collections held by the Theatre Museum are being organized, digitized, and utilized for research.

This document will highlight two particularly noteworthy examples from a research project initiated in 2024 that examines the creation and activities of 20th century *shingeki*. One team is investigating, transcribing, and examining unorganized and unpublished materials in the Kubo Sakae Collection held by the Theatre Museum. Kubo Sakae (1900-1958) was an important playwright and director of Tsukiji Shogekijo, who inherited and developed the artistic philosophy of the theater's founders Osanai Kaoru and Hijikata Yoshi, as well as an artistic leader of the *shingeki* group before and after World War II. In the process of organizing and digitizing the materials, the team is also working on several extremely interesting exhibits related to Tsukiji Shogekijo. Another team is examining the collection of Kurabayashi Seiichiro, a member of Haiyu-za, one of the leading *shingeki* companies of the prewar and postwar periods. Kurabayashi Seiichiro (1912-2000) was one of the most important producers in the postwar *shingeki* world. He spearheaded the construction of the Haiyu-za Theater and became its president in 1981. His activities played a decisive role in introducing the concept of "producer" to *shingeki*. Regarding early *shingeki*, the establishment of its artistic foundation is examined by drawing insights from the scripts and direction of Kubo Sakae. As for late *shingeki*, the creation of its production system is analyzed and elucidated through the study of Kurabayashi Seiichiro's diaries. These studies complement each other and are producing important results for a comprehensive understanding of *shingeki*.

2. Further Development of Projects

The second platform, "Encouragement Research," was led by young researchers at the Theatre Museum, who conducted basic research essential to the museum's collections. By carefully examining the museum's collections and focusing on specific themes, the researchers are building a solid foundation to support subsequent research on people, motifs, and genres. Notably, each project is interacting with the others while continuously developing and changing.

After the museum's research and exhibition of Ota Shogo's materials, a new joint project was launched with "the Center for Cross-Disciplinary & Practical Research

on Creation and Perception of the Performing Arts" at the Kyoto University of the Arts Kyoto Performing Arts Center, where Ota served as director in his later years, and several events related to the exhibition were developed.

Furthermore, a symposium was held to explore Ota Shogo's unique theatrical style, with screenings and talk sessions on *Komachi Fuden* (The Tale of Komachi Told by the Wind) and *Mizu no Eki* (The Water Station), two works profoundly related to the "silence" and "slowness" of Noh theater. Moreover, the contemporary significance of Ota Shogo's works has been reevaluated through dedicated research meetings. The international influence of Ota Shogo was examined through the Korea-Japan joint project *Sarachi* (The Vacant Lot) and the production of *Mizu no Eki*, which was staged at the Korea National University of Arts. As part of these projects, an online interview was conducted with Kim Soo-gi, the Korean actress who played the role of the "woman" in *Sarachi* and directed *Mizu no Eki*. Following the preliminary research and exhibition of Ota Shogo's works at the Theatre Museum, this joint project has been extremely meaningful in enhancing understanding of the materials studied and disseminating the results to society.

3. Synergies Between Archiving and Research

The most important aspect of the activities undertaken by the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts is its close collaboration with the Theatre Museum as an archival institution. The Center is engaged in a wide range of efforts to survey existing materials, organize and integrate various basic knowledge, create new research, and develop data for the Theatre Museum. These projects, which have progressed between 2020 and 2025, clearly demonstrate that the Center, established in 2009, has played a pivotal role in revitalizing the activities of the Theatre Museum, laying an essential foundation for future theater and film studies.

4. Toward Future Development

Having witnessed many original results produced by the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts managed by the Waseda University Tsubouchi Memorial Theatre Museum over the past 6 years, I strongly hope that the Center's activities will continue in the future. These efforts are extremely important to Japanese culture and have laid a solid foundation for researchers and students in Japan and abroad to understand and disseminate Japanese theater and film culture to the rest of the world. I strongly support the continuation and further development of the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts.

編集：冬室 明美 内田 隼美

翻訳：クリムゾンインタラクティブ プライベート リミテッド

発行者：文部科学省「共同利用・共同研究拠点」

早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点

拠点代表：児玉 竜一

早稲田大学演劇映像学連携研究拠点

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学早稲田キャンパス6号館

TEL：03-5286-1829 URL：https://prj-kyodo-enpaku.waseda.jp/

Edited by: Fuyumuro Akemi, Uchida Hayami

Translated by: Crimson Interactive Pvt. Ltd.

Published by: Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology-Japan

"Joint Usage / Research Center", Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, Theatre Museum, Waseda University

Center Leader: Kodama Ryuichi

Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, Waseda University

Building 6, Waseda Campus, Waseda University, 1-6-1 Nishi-Waseda, Shinjuku-ku, Tokyo, 169-8050

(+81)3-5286-1829 URL: https://prj-kyodo-enpaku.waseda.jp/